

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因 に関する研究（第Ⅱ部） — 「東洋的見方」が及ぼす影響を中心にして—

奥村 幸雄

要旨

本研究の目的は、老年的超越の影響因を文化・心理・社会的な側面から明らかにすることであった。量的研究(奥村, 2022b)の対象者のうち17人の後期・超高齢者についてはインタビュー調査(質的研究)を実施した。量的研究で老年的超越への影響因の一つとなった主観的幸福感(SWB)については、質的研究での事例・コード分析の結果、「幸福」についての感じ方や内容がPGCモラル・スケールによるSWBとは異なるものであることが示唆された。身近な人との「つながり」を重視する傾向や、十分生きたことに感謝する気持ちが反映され、これらは関係・バランス志向性を重視する幸福(内田, 2020)に類するものであった。また、Tornstamの老年的超越理論の「宇宙的次元」に関わる内容が多く抽出され、いずれも東洋的見方の特徴に通じるものであった。量的研究と質的研究を統合した結果を「要因関連の概念モデル」としてダイアグラムで表示した。

はじめに

本研究の目的は、西欧で提唱された老年的超越の考え方が、日本人の「幸福な老い」の実現にどのような影響(効果)を及ぼすのか、文化・心理・社会的な側面から検討することであった。そこで、本研究における課題を、文献検討[トーンスタム(Tornstam)の老年的超越理論、日本の先行研究、《東洋的なるもの》の概念検討]をふまえて、実証研究(量的研究、質的研究)では、(1)日本版老年的超越質問紙改訂版(JGS-R)の再現性の検証、(2)老年的超越が幸福感到に及ぼす影響の分析、(3)老年的超越の関連要因、なかでも東洋文化的な要因による影響の分析、(4)当事者研究の視点に立った分析、といった四つの事項に設定した。

文献検討¹では、老年的超越理論の提唱者であるトーンスタムが著した“*Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging*”(Tornstam, 2005)にもとづき理論の起源や枠組み、老年的超越の測定尺度、関連要因について整理するとともに、この理論を日本人に適用するにあ

*1 博士論文(奥村, 2022a)第1章～第3章において詳述。

たつての問題点や留意点について検討した。さらに、日本における先行研究をレビューするとともに、《東洋的なもの》の概念検討では、老い・東洋文化・ユング心理学に関する書籍を参考に〈東洋的な見方〉の概念構造を検討し、質問紙の設問項目や、インタビュー調査におけるコード（概念的カテゴリー）の検討を行った。

実証研究²では、量的研究については質問紙調査、質的研究についてはインタビュー調査を実施した。調査対象者は、主として京都府在住の60歳以上の高齢者363人（京都SKYシニア大学受講生294人、その他69人）とし、有効回答数は251人（男性140人、女性111人、平均年齢75.3歳）であった。うち17人の後期・超高齢者（男性7人、女性10人、平均年齢85.1歳）は、質問紙調査に加えてインタビュー調査を行った。老年的超越の関連要因については、年齢、性別、健康度、配偶者の有無、教育歴、暮らし向き、活動性、危機の経験などの背景的な要因に加えて、文化的要因として「東洋的な見方」を組み込んだ構造方程式モデル（SEM）を構築し分析を行った。

量的研究の詳細については、京都府立大学学術報告（奥村, 2022b, pp.123-171）でも第I部（以下、第I部という）として報告したが、要点のみを記すと以下のとおりである。

第1は、老年的超越に影響を及ぼす要因間の関連において性別による違いが認められた。男性では、直接効果が認められたのは、主観的幸福感、東洋的な見方、危機の経験であり、活動性、暮らし向きについては、主観的幸福感を介して老年的超越に影響を及ぼす。年齢については、老年的超越への直接効果は認められなかったが、東洋的な見方を介して間接的に影響を及ぼしている可能性がある。一方、女性では、老年的超越への直接効果が認められたのは、主観的幸福感、東洋的な見方、年齢であり、暮らし向きについては、男性と同様、主観的幸福感を介して老年的超越へ影響を及ぼす。

第2は、老年的超越への強い影響因となった東洋的な見方と主観的幸福感に関して、この2つを基準変数とするクラスター分析の結果、3つのクラスターが抽出され、クラスター2が老年的超越の6つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、老年的超越を肯定的に捉えている群であることが確かめられた。クラスター2の特徴は、主観的幸福感が中庸のレベルにあることであり、この場合に老年的超越の得点が高いということは、東洋文化の影響を少なからず受ける日本人高齢者の幸福感には、「バランス志向的幸福観」（内田, 2020, p.67）の特徴が反映されていることを示唆するものである。

このように量的研究では、質問紙調査によって得られた数値データを統計解析することによって、調査対象者の傾向やパターン、老年的超越に影響を及ぼす要因などについてある程度明らかにできたが、現在を生きる高齢者が自分の「老い」や、その先に確実に訪れる「死」についてどのように捉えているのか、この点を理解するためには量的研究だけでは限界がある。

量的研究が「森を見る」ことに主眼を置いたものであるとするならば、質的研究は「木を見る」ことに焦点を当てるものであり、本研究の目的は、視点の異なるこれら二つの研究を考量することで、さらに日本人高齢者の老年的超越の特徴について理解を深めようとするものである。した

² 博士論文（奥村, 2022a）第4章および第5章において詳述。

がって、質的研究における問いを次のように設定した。

- (1) 量的研究で明らかとなった3つの類型³について、質的にはどのような個別性や特殊性がみられるのか。
- (2) 3つの類型の個別性や特殊性を超えて、さらに共通する要素、異なる要素はどのようなものか。また、類型を超えた老年的超越の一般的な促進要因となるものが存在するのか。

本稿では、まず質的研究について述べたのち、**I 量的研究**と**II 質的研究**の統合を試みる。最後に本研究全体を通じての問題点と今後の課題について述べる。

II 質的研究

1. 方法

質的研究では、17人の高齢者（後期高齢者：8人、超高齢者：9人）を分析対象とした（以下、研究協力者という）。この人たちの選定にあたっては、①年齢は75歳以上で80歳代を中心に90歳代も含まれること、②構成は男女のバランスがおおむね保たれていること、③60分程度のインタビューに応えられる体力・健康度を有していること、④調査の内容に関心があり、自主的な協力が得られること、⑤京都府内に在住しており、農村部・都市部のバランスがある程度保たれていること——を条件とし、具体的には、公益財団法人京都SKYセンターから紹介を受けた人、筆者が個人的に研究協力を依頼した人を分析対象とした。質問紙は事前に郵送し、インタビューは半構造化自由回答法にもとづき行った。調査期間は2019年2～3月であった。

なお、本研究は、京都府立大学倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号168）。すべての研究協力者に対して調査の内容やプライバシーの保護に関する説明を書面や口頭で行い、あわせて書面により調査への同意を得た。

本研究の主要テーマが老年的超越の関連要因、なかでも東洋の見方の影響（効果）を考察することにあるので、文献検討における《東洋的なるもの》の概念検討で中核的となるコードは概ね絞り込まれている（図1参照）。したがって、インタビューでの設問項目は、この考え方にもとづき次の12項目（太字）のコード（概念的カテゴリー）とした⁴。

生まれ育った時代や文化の影響は、その人の性格や自己観・人間観、ひいては幸福観に影響を及ぼすと考えられるので（コホート効果）、コード名は、**生きた時代**、**幸福観**、**性格・自己観・人間観**とした。さらにTornstam（2005）の老年的超越理論（以下、老年的超越理論という）の3つの次元（表1：宇宙次元、自己次元、社会と個人との関係の次元）のうち、東洋文化の

*3 量的研究におけるクラスターと同義であるが、質的研究では研究協力者17人に限定した分類であることから、あえて「類型」という表現を用いることとした。

*4 《東洋的なるもの》の検討の詳細は奥村（2022a）によるが、図1や「〈古い〉に対する東洋的態度」の設問項目を手掛かりにKJ法を用い類似した要素をグルーピングし、「小見出し」（表札）をつけたものが12項目のコード（概念的カテゴリー）である。

影響を受ける日本人高齢者では「宇宙的次元」との関連が考えられるので、コード名は、**自然・芸術に共感する心、回想、人生の危機、無常観・死生観、宇宙的感觉（命の連鎖）、共時的体験（夢と現実の一致）、時間認識、空間認識**とした。また、老年的超越理論の3つの次元には含まれないが、東洋の老子哲学に因んで**無為自然**とした。

実際のインタビューでは、これらのコードが意味するところをふまえ、対話を通じて自身がこれまで歩んできた人生の足跡、「幸せ」と感じる**とき**や**こと**、病気などの困難を乗り越え到達した現在の心境、「老い」との向き合い方、「死」に対する思い——などについて聴取した。コードが含意する内容の多くは、《東洋的なもの》の概念検討の結果到達した「東洋の見方」にもとづくものであるが、抽象的で難解にならないよう留意しながら会話を組み立てた。

なお、**宇宙的感觉（命の連鎖）**については、その人の宇宙観のほかに、一体性（母性的な愛）の象徴としての「月」と、二元性（光と闇）の象徴としての「太陽」を例示し、どちらに親近感を覚えるかを聞いた⁵。また、**時間認識**⁶と**空間認識**⁷については、簡易なサークル・テストを行った。

分析手法としては、まず、研究協力者17人の質問紙調査で得られた量的データおよびインタビューで得られた質的データのすべてについて1次情報処理（発話内容を文書セグメントとして要約）を行い2次元のマトリックス表（未添付）で整理した。なお、インタビューでは、その場で調査者が質問を読み上げ、本人が質問紙の設問を埋めていったケースもあったため、制限時間切れとなり予定した設問の一部は未回答となったものもあった。

ところで、このマトリックス表では個々人の発話内容が埋め込まれているだけで、全体のパターンを大掴みに捉えることは困難である。そこで、さらに文書セグメントの内容を圧縮・要約して示したのが表2である。

表側は3つの類型を示し、研究協力者の数は、類型Ⅰ：6人、類型Ⅱ：6人、類型Ⅲ：5人であった。また、表頭は12項目のコード（概念的カテゴリー）を示している。各類型に対応するコード（概念的カテゴリー）の内容については、2次元のマトリックス表で共通する発話内容がある場合にはこれを集約・縮約し、そうでない場合には個々の発話内容をさらに圧縮するなどの2次加工を行ったものを記載した。

⁵ 河合（1977）は、日本人の意識構造について「夢」を例に挙げ説明するなかで、「西洋の意識は太陽の意識であり、東洋のそれは月の意識であるという言いかたもできる」（p.184）と述べており、この話を参考にした。

⁶ 正規のサークル・テスト（都築・白井編, 2007, p.30）ではないが、過去（これまでに生きてきた時間）、現在（今生きている時間）、未来（このあと生きるであろう時間）について、現時点での関心の度合いをサークルの大きさに表現してもらった。

⁷ 自分が生活を営む空間領域について、近景（自分や家族の身近な問題）、中景（地域や文化に関わる問題）、遠景（神仏や宇宙などのスピリチュアルな世界）と区分した場合、現時点における関心の度合いをサークルの大きさに表現してもらった。

「老年の超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）

— 「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

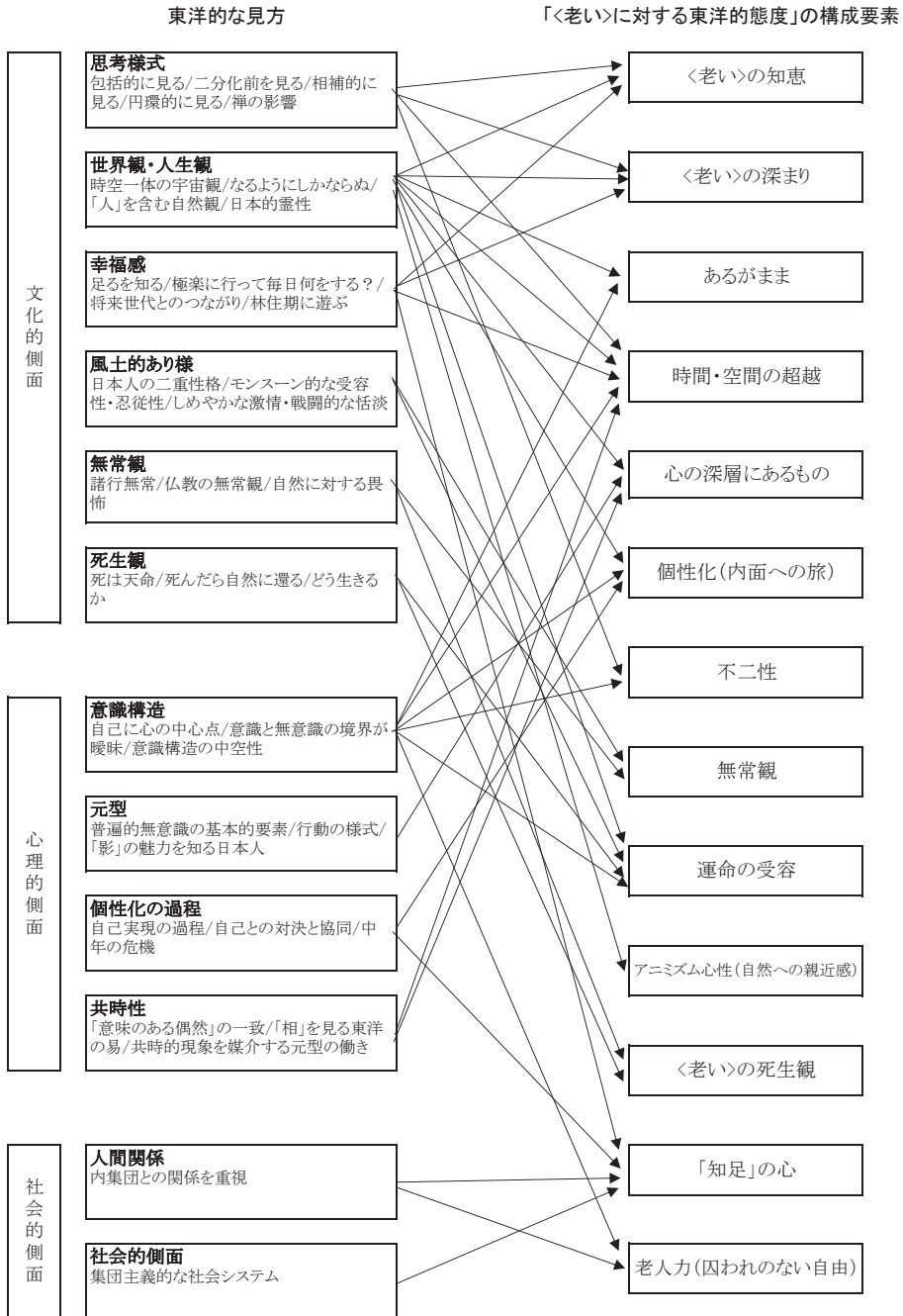


図1 東洋的な見方と「<老い>に対する東洋的態度」の構成要素との関係

(出典)鈴木(1997)、河合(1967)、和辻(1935)、Nisbett(2003)などの文献を参考に作成。
詳細は奥村(2022a)による。

表1 老年的超越の3つの次元とコードおよび内容

次元	コード	内 容
宇宙的次元	時間定義の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の定義が変化 → 直線から円環へ ・過去と現在の境界の超越 → 幼年時代への回帰 ・人生の意味の振り返り → ときに和解 (reconciling) の手段
	世代間のつながりの認識	<ul style="list-style-type: none"> ・単体としての命 → 命のつながり(連鎖の視点へ変化) ・過去に生活を共にした人々への親近感の増加 ・「遺伝子の鎖」は不死の証し
	死生観の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・死ぬような体験をすると死への恐怖心が消える。 ・無意味な延命や苦痛を伴う死に方を恐れる。 ・人生後半期での成熟は、生と死に対する新たな見方を喚起
	神秘性の気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・この世には人知や感覚を超えた未知なるものが多々ある。 ・音楽や絵画によって言葉の壁を超越 → 生命の神秘に気づく。 ・瞑想することで時間や空間の壁を超越する。
	宇宙との一体感	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな出来事 → 日常のささやかな体験へ(音楽や絵画など) ・自然の中での体験は宇宙との一体感を覚醒 → 自己と宇宙との障壁を超越する喜びを喚起
自己の次元	自己との向き合い	<ul style="list-style-type: none"> ・Jungが「影」と呼ぶパーソナリティの隠れた側面(良い面も悪い面も)に気づく。 ・これまで意識してこなかった自己中心性の気づき
	自己中心性の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が宇宙(集団)の中心にいるとの思い込みが変化 ・自惚れではない適度の自信は必要(自尊心が低いのは問題)
	身体的超越	<ul style="list-style-type: none"> ・体のケアは怠らないが、若さに執着はしない。
	自己超越	<ul style="list-style-type: none"> ・利己主義から利他主義への移行(特に男性にとって重要)
	自我統合	<ul style="list-style-type: none"> ・人生はジグソーパズルの各ピースの全体集合 → パズルの微妙な状態(自我)の保持には、平穏さや孤独が果たす役割を認識
社会と個人との関係の次元	人間関係の意味づけの変化	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係が選択的になり、表面的な関係への関心が低下 → 一人である時間の必要性が増加 ・「撤退」ではなく、ポジティブな「孤独」を求める。
	社会的役割についての認識の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・役割は人生で必要とときもあるが、「変装」は老年的超越の発達を妨げるサイン ・自分らしくある (be oneself) ためには自信を持つこと
	社会的因習からの決別	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的因習から決別する能力であり、受容力の高さを示す。 ・無垢さを恥ずかしがらずに認める → 自分の成熟度が高まる。
	財産への執着心の鈍化	<ul style="list-style-type: none"> ・財産への執着心の鈍化 → 解放感の広がり ・生活必需品以外の物の所有は無意味 → 人生の旅も後半では荷物も軽く
	平凡にして深い知恵の獲得	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の行動を、寛容、忍耐、謙虚さの視点で観察 → 表面的な判断の二元性(善と悪、賢と愚など)を超越

(出典) Tornstam(2005)より筆者が要点を訳出し作表。

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 —「東洋的見方」が及ぼす影響を中心にして—

表2 類型ごとの事例—コード・マトリックス総括表

類型	コード（概念的カテゴリー）			
	生きた時代	幸福観	性格・自己観・人間観等	無為自然
I (低SWB・ 低東洋的見方 群)	<p>年齢：70代(B)、80代(C,D,E,F)、90代(A)</p> <p>少年時代：軍国教育一色。戦時中は女学生も労働動員、空襲・爆撃を体験。戦後は厳しい食糧難、世間の不公平と理不尽さ(A)。それでも世の中が明るくなりある種の解放感を感じた人も(D)</p> <p>青年時代：外来語の禁止、楽しい思い出は何もない(A)。教員になりPTA活動に参加(F)。全員職業(商売、医院手伝い、宗教学、公務員、教員)を持つ。</p> <p>壮年以降：全員仕事、4人(B,C,D,F)は地域活動に関わる。</p> <p>振り返って：戦争は絶対ダメ、こんな時代は「もうコリゴリ」との思いが身に沁みている。</p>	<p>4人(A,B,C,D)は、家族・隣人・友人との良い人間関係に、Fさんは、自己解放感という内面的な変化に幸福感を感じている。老年的超越の「社会と個人との関係の次元」(社会的因習からの決別)に通じる。</p> <p>↑</p> <p>・子供が家庭を持ってくれたこと(A)</p> <p>・かつて生活した土地への帰還に際して、人も自然も温かく迎えてくれたこと(B)</p> <p>・宗教学人なので人の幸福を考える立場。人から慕われる人間でありたい(C)</p> <p>・年相応、体力に応じて楽しみを見つけていく。良い人間関係(B,D)</p> <p>・ありのままの自分を見せることができるようになった自己解放感(F)</p>	<p>6人全員、対人関係では外向的な態度が強くて出ているように思われるが、内向的な態度が隠れている場合もある。歳を重ねるなかで、自己の内面に意識が向かうという人も(F)。</p> <p>↑</p> <p>・楽天的。本も読み老いを受け入れる心の準備はできていたつもりだが難しいこと(A)</p> <p>・人を差別しない。嫌なことは忘れ、良いことだけ覚えておく。引き受けた役は責任を果たす(B)</p> <p>・優柔不断なのか、人から悪口を言われることがない(D)</p> <p>・この歳になって思う。人間は生かされているんだと(F)</p> <p>・宗教学人なので人を生かすことを考える(C)</p> <p>・戦時中、ある先生の印象に残る勇敢な行為、戦後教員となった自分の心の支え(E)</p>	<p>孔子よりも老子に共感する(F)。イメージは「すべてを含む」「あるがまま」「がんばらない」(A,D)。悟りのレベルには未だ達し(D)。自然体もいいが能動的に変えていくことが必要な場合もある(C)</p> <p>↑</p> <p>・「あるがまま」ということ(A)</p> <p>・自然体でいい場合もあるが、積極的に変えていくことが必要な場合もある(C)</p> <p>・「がんばらない」には共感するが、悟りは難しい(D)</p> <p>・老子はすべてを含む。孔子はあまりにも道徳的(F)</p>
II (中SWB・ 高東洋的見方 群)	<p>年齢：70(K)、80(G,I,J,L)、90代(H)</p> <p>少年時代：軍国教育一色。出征する父との寂しい別れ(L)、引き揚げ時の恐怖体験(I)、農村では子供も労働力(J,K)。戦後の厳しい食糧難</p> <p>青年時代：戦中、農家への嫁入り、家族関係に苦労(H)。戦後、子供が生まれ、ようやく自分の人生が実感(I)。英語教員になるため大学へ(G)、手に職をと看護学校へ進んだ人(L)。全員職業(教員、農業、公務員、会社員、看護師)を持つ。</p> <p>壮年以降：全員仕事。地域活動(H,J)に関わる。</p> <p>振り返って：戦争は「もうコリゴリ」。戦争の悲惨さを孫に話しているという人(L)、80歳にして不戦の思いから「女性の会」を立ち上げ活動を始めた人も(H)</p>	<p>この歳まで来れたことに感謝しつつ時々状況に柔軟に処していくことで生の充実感(H,I,J)。気の置けない仲間や思いを同じくする同好の土との交流に喜び(J,K,L)。</p> <p>↑</p> <p>・幸福感は文化を大事にする生活のなかにある。今が一番幸せ(G)</p> <p>・状況に応じて感じ方は変わるが根っこは同じ。「十分に生きた」という実感。今は幸せ(H)</p> <p>・健康であること。自分の思いを状況に合わせて変えることで喜びにつなげる(I)</p> <p>・この歳まで来れたこと。自分らしく生きられればよい(J)</p> <p>・便利になった今の生活、親しい仲間との飲み会(K)</p> <p>・仕事を無事に動機上げたこと。趣味や思いを同じくする友人との交流(L)</p>	<p>外向的な人は、自分軸が振れることなく相手の立場に立って考える傾向がみられる。内向的な人は、周りをよく見て状況に応じて自分軸を変化させていく。悟りに近い死生観(天命)を持つ人も(G)</p> <p>↑</p> <p>・相手の立場に立って考え、自分はどう生きるかを考える。頼まれた役は断らない(H)</p> <p>・専門なことでは外向的だが、主張しすぎて対立することは好まない(L)</p> <p>・“そうなりたくない”と思う年寄りにならないよう心掛け(I)</p> <p>・角が立たないように周りに気を使う(J)</p> <p>・生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること(G)</p>	<p>イメージは「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」(H,I,J,L)。自然の力に比べれば、人間の力はしたるもので、自分だけがあいてみても何もない(H)</p> <p>↑</p> <p>・自然の力に比べれば、人の力なんかしたるもの。なるようになる(H)</p> <p>・もう“がんばる”のは御免。できることだけをすれば、それでよい(I)</p> <p>・できないことは、成り行きに任せる。自分だけがあいてみても何もない(J)</p> <p>・何事もがんばりすぎないように心がけている(L)</p>
III (高SWB・ 低東洋的見方 群)	<p>年齢：80代(M,N,O,Q)、90代(P)</p> <p>少年時代：軍国教育一色。外地での裕福な生活(M)。内地では空襲・爆撃の恐怖。天皇のために死ぬことも覚悟(P)。戦後の厳しい食糧難</p> <p>青春時代：戦後の戦争批判、世間の変わり身の早さに違和感(P)。病気で高校進学を断念(M)。洋教を学ぶため渡米(O)。勝敗だけにとこだわるスポーツに疑問(Q)。全員職業(会社員、公務員、障がい者施設職員、研究者)を持つ。</p> <p>壮年以降：仕事、ボランティア、「居場所」を始めた人も(P)</p> <p>振り返って：あんな時代は「もうコリゴリ」。戦後、世間の変わり身の早さに違和感(P)。戦後の厳しい時代のことを思えば少々のことは辛抱できる(M)。</p>	<p>戦争が終わって、自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことでの充実感(M,N,O,P,Q)</p> <p>↑</p> <p>・健康で束縛なく好きな時間を過ごせること。今が一番幸せ(M)</p> <p>・かつての仕事仲間との人間関係。家族の心配事があったときのほうが幸せ感があった(N)</p> <p>・夢を実現させた米国での生活、親しいボランティア仲間。日々平和に過ごせること(O)</p> <p>・自由に生きられること。自著が今も業界のテキストとして使われていること(P)</p> <p>・妻子が近くにくれること。昔どおりのことを現在に望むことはない(Q)</p>	<p>外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない。若いときには内向的であった人が様々な人生経験を積む中で外向的に変化してきたのが特徴(O,P)</p> <p>↑</p> <p>・くよくよしない、何が応じてもしようがない。明日になればまた変わる(M)</p> <p>・若いときは劣等感に落ち込むこともあったが、渡米によって消失。あれこれ考えない、なるようになる(O)</p> <p>・若いときは内向的、年寄りになって外向的に。フレキシビリティがあり、物事に固執しない(P)</p> <p>・人とのトラブルを避ける習性、表立ったことはしない(N)</p> <p>・神仏の力には懐疑的。この考えが人生観の背後に(Q)</p>	<p>イメージは「手術台に乗った気分」「あるがまま」(M)、「自然体」(P)、「無理に頑張らない」(Q)。できなくなったことを嘆いてもしようがない。できる範囲で楽しく、それで十分(O)</p> <p>↑</p> <p>・手術台に乗った気分。「あるがまま」(M)</p> <p>・できなくなったことを嘆いてもしようがない。できる範囲で楽しく、それで十分(O)</p> <p>・若いときに狂子に共鳴、自然体が良い(P)</p> <p>・若い頃のようにはいできない。無理して頑張る必要はない(Q)</p>

(注) 矢印の上段は、下段の発言内容(要約)をさらに縮約したものを示す。()内の記号は研究協力者のID。

京都府立大学学術報告（公共政策）第15号

類型	コード（概念的カテゴリー）			
	自然・芸術に共感する心	回想	人生の危機	無常観・死生観
I (低SWB・低東洋的見方群)	<p>自然が好きで芸術的なことに関心を持つ人が多い(全員)。歳とともに芸術への共感力が増してきたという人(C,D)、演奏のテクニックより一生涯懸命に演じようとする姿に感銘を受けるようになったという人も(F)</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然や花が好き。白い雲は変化があつて見飽きない(A) ・自然が好き、丹後の海には励まされる(B) ・芸術に関心。老いてなお熱成させていく心境(C) ・芸術に共感する心は増してきた(D) ・子供の頃の自然につながる体験は、自分の考え方にも影響(E) ・若いときは演奏のテクニックに感動、今は一生涯懸命やろうとする心に感銘(F) 	<p>過去回想が主で未来志向的な回想ではない。</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1歳の子供を亡くしたこと、親しい友人を亡くしたこと。時々思い出すが悲しい(D) 	<p>3人(A,C,D)ががんなどの重篤な病気を経験、2人(B,F)が子供の死・瀕死の事故で人生の危機を経験している。</p> <p>↑</p> <p>障がい者になったことで、人に助けられること、おかげ様を実感するようになったという人(C)</p> <p>↑</p> <p>重篤な病気</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色々あつた(2回の大手術)と言われるが思い出せない。子供がいたから乗り越えられた(A) ・がんの手術。障がい者になったことで、人に助けられ“おかげ様”を実感(C) ・脳内出血で1週間記憶を喪失。高齢になってからもがんと経験(D) <p>人生の危機</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5歳の娘を亡くした経験(B) ・子供がケニアで学術調査中に引き逃げに遭いロンドンで緊急手術、自分も死を覚悟(F) 	<p>無常観については、3人(B,D,F)が共感を示す。死生観については、宗教者のCさんは明快であるが、Fさんはまだ死を受容していない。“どう生きたか”に関心がある。</p> <p>↑</p> <p>無常観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・無常感がないと人は生きていけない。事故死の可能性は覚悟(B) ・病気を受け入れる覚悟はできている。「風にそよぐ葉」のような生き方をしてきたので、今さら人生観は変わらない(D) ・どんなにお金があつても、必ず人間は死ぬ(F) <p>死生観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・死は受け入れるよりしょうがないが、あの世は未知で不安(A) ・死んだら仏になる。人は神仏の加護で助けられている(C) ・まだ死を受け入れてはいない。生きてことに感謝。魂は残された人の記憶に残るので、ちゃんと生きなければ(F)
II (中SWB・高東洋的見方群)	<p>自然を好み芸術に関心を持つ人が多い。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じるという人(H)。年とともに芸術的なものへの共感力が増してきた人(G)。若い頃は洋楽に関心、今は日本的なものの方が気持ち落ち着く人(I)。お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景に心が動かされる人(L)</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の自然に対する親近感。歳とともに芸術的なものへの共感力が増す(G) ・自然はいい。山があり、木があり、花があり、対話できる(H) ・若い頃は洋楽に関心、今は日本的なものに心が落ち着く(I) ・若い頃から詩や文学に関心。好きな詩集を読み返すと、当時の情景が蘇り心が動かされる(L) 	<p>過去回想が主であるが(H,I)、回想に否定的な人(J)、Lさんのように未来志向的な回想をする人も。</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供の頃、みんなと仲良く遊んだ楽しい思い出(H) ・忘れたいのにとと思うが、苦しかったこと(I) ・今さら過去へは戻れない(J) ・戦争で苦しんだ時代があったことを孫に話す(L) 	<p>重篤な病気を経験した人は2人(H,K)。共に危機の経験により人生観が変化。Hさんは、健康のありがたみを実感し氏神さんに参ることが日課に。Kさんは、四国霊場巡りで生き方がプラスの方向に変化。</p> <p>↑</p> <p>重篤な病気</p> <ul style="list-style-type: none"> ・50代で1年近く入院。病気がなつたことで色々と思うところが、以来、健康のために氏神さんに参ることを日課に(H) ・顔面手術の経験、完治後3年かけて四国霊場巡り。人生観がプラスの方向に変化(K) 	<p>3人(G,H,L)が無常観に共感を示す。死生観についても死は天命として受け入れており恬淡としたところがある。Hさんは、他者とつながる魂の存在を感じている。</p> <p>↑</p> <p>無常観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生まれたものはすべて死ぬ。天国が地獄か、考えてもしょうがない(G) ・100歳より長くは生きられない。形はなくなるが、他者につながる魂の存在を感じる(H) ・死ぬと「無」になるのは仕方ない、受け入れられると思う(L) <p>死生観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車引きをしながらバタツと死ぬのが理想。亡き主人が近くにいる気がする。感謝(I) ・この世は仮の宿。縁があつて居るだけ。死は、それほど深刻に考えることではない(J)
III (高SWB・低東洋的見方群)	<p>演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。この歳になって、本が好きになつたという人(O)、わからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いているという人も(F)</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もともと芸術好き。月に一度は演芸を聞きに行く(M) ・若い頃からアートに関心。展覧会によく行く。この歳になって、本が好きに(O) ・若い頃は絵画に関心。今はわからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いている(P) ・昔は展覧会に行ったが、体調を崩してからは行けてない(Q) 	<p>過去回想が主で未来志向的な回想はない。</p> <p>↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意識的に楽しかったことを思い出さずようしている。未来指向の回想はしない(Q) ・子供の頃の思い出に触れ懐かしんでいる程度(P) ・過去のことを思い出しても、今さらどうしようもない(Q) 	<p>2人(M,Q)は、がんによる手術の経験があり、Mさんは、ある種の覚悟ができており今を生きていること楽しんでいる。Qさんは、術後30年近くになるが再発もなく医師が驚く逞しさ。</p> <p>↑</p> <p>重篤な病気</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大腸がんの手術。健康のありがたさを実感。いつ何があつてもしょうがないと思える。好きなことをしたい(M) ・60代でがんの宣告。諦めかけていた医師を“もっと勉強してくれ”と鼓舞(Q) 	<p>死生観については、4人(M,O,P,Q)に違いがあるが、死んだら無になるというMさん、好奇心がありこの世の行く末を見届けたいというPさん、ぼちぼち神仏に頼ることも考えなければというQさん。時が来れば死を受容する態度は、おおむね共通している。</p> <p>↑</p> <p>無常観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まだ、考えていない(N) <p>死生観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・死んだらお終い。なるべくなら長生きしたい。魂の存在を考えたことはない(M) ・10年ほど前は死を怖く感じたが、今は何とも思わない。自然に死を迎えられると思う(O) ・いずれ死ぬことはわかっていて、好奇心があるのでこの世の行く末を見届けたい(P) ・歳をとつたので、少しは神仏に頼らないかんのかとも思う(Q)

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）

—「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

類型	コード（概念的カテゴリー）			
	宇宙的感觉 (命の連鎖)	共時的体験 (夢と現実の一致)	時間認識	空間認識
I (低SWB・ 低東洋の見方 群)	<p>母性的な愛の象徴として例示した「月」に親近感を覚えると答えた人が4人(A,B,D,F)、光と闇の象徴としての「太陽」と答えた人は0であった。</p> <p>宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観を持つ人も(C,F)</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>月に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夜空に浮かぶ月は不思議(A) ・月や星を見ると心が安らぐ(B) ・他に(D),(F) <p>太陽に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なし <p>宇宙観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・神は宇宙に存在するもの。宇宙に包まれている感覚がある(C) ・無神論者だが、人智の及ばないものもあると思う(D) ・人間は宇宙の一員、宇宙とは一体のもの(F) 	<p>共時的体験を有するのはFさんのみ。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。3日後に事故の知らせがきた。偶然には意味があると思う。 	<p>3人(C,D,F)は、現在>過去>未来と現在を重視する傾向があり、次いで過去、遠い未来のことはわからないという。Bさんは、過去・現在・未来は連続的なもので「境」はないという。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>A: 過去のことも、現在のこともすぐに忘れる。未来はない。 B: 過去・現在・未来の間に境界はないと思う。 C: 現在>過去>未来。過去は苦労した思い出。未来はわからない。 D, F: 現在>過去>未来</p>	<p>Aさんを除いて4人は中景(地域や文化)を重視する傾向があり、次いで近景(自分や家族)、遠景(神仏や宇宙)は近景と同程度または近景より小さい。これらの4人は、現在も地域活動に関わりを持つ。</p> <p>近景と遠景が同程度と答えた2人(C,D)とFさんは、宇宙や魂の存在を肯定または否定はしない。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>A: 見当識障害あり B: 中景を重視 C: 中景>近景・遠景 D: 中景>近景・遠景 F: 中景>近景>遠景</p>
II (中SWB・ 高東洋の見方 群)	<p>月に親近感を覚える2人(H,J)は、人生の投影や神秘性に、太陽に親近感を覚える2人(I,L)は、エネルギーの源として、また光と影の二元性に惹かれる。</p> <p>Gさんは、東洋的な宇宙観を持つ。Hさんは宇宙の象徴として太陽を捉えている。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>月に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の人生までもが投影されているように感じる(H) ・星の神秘性、夜空を見上げるのが多くなった(J) <p>太陽に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業をしているので太陽とともに生きている(I) ・光と影に惹かれる。生き生きとしている(L) <p>宇宙観</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インドの思想では、宇宙は陰陽が関係。その大きさは脳の判断の結果(G) ・赤い太陽に宇宙を感じる(H) 	<p>共時的体験を有する人はいない。</p>	<p>今をどう生きるかに関心があり現在を重視する傾向がある。過去については評価が分かれ、最も重視しているのはIさん、Lさんは現在と同レベルで関心があり、見ないようにしているのはJさん。未来については、3人(I,J,L)は関心が低い。Gさんは時間の実体は「無」と哲学的な捉え方をしている。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>G: 過去・現在・未来は脳の判断によるもので実体は「無」 I: 過去>現在>未来 J: 現在をどう生きるかに関心、過去は見ないようにしている。この歳で未来はない。 K: 現在>過去・未来 L: 現在・過去>未来</p>	<p>3人(I,K,L)が近景>中景>遠景となっており、自分や家族のことについて最も関心が高く、次いで、地域や文化、神仏や宇宙については関心が低い。</p> <p>中景に最も関心が高い2人(H,J)は、地域との関わりが深い。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>H: 中景>近景・遠景 I: 近景>中景>遠景 J: 中景>近景>遠景 K: 近景>中景>遠景 L: 近景>中景>遠景</p>
III (高SWB・ 低東洋の見方 群)	<p>月に親近感を覚える人は2人(O,Q)。Qさんは、「静」をイメージするが母性愛を感じることはない。2人(M,N)は太陽に親近感を覚える。</p> <p>東洋的な宇宙観を持つ人はいないが、Pさんは、身近な経験として「見えないもの」の気配を感じることがある。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>月に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・静かな印象。しかし母性愛を感じることはない(Q)。他に(O) <p>太陽に親近感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(M),(N) <p>宇宙観/見えない世界</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇宙とのつながりを感じることはない(M,O) ・星を見て宇宙的な感慨にふけることはないが、歩いているとき、一人のときに、ふと肩を叩かれたように感じることもある(P) ・見えない世界には懐疑的(Q) 	<p>共時的体験を有するのはOさんのみ。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父の死も母の死も事前に夢で知った。母のときは、華やかな花の夢をみた。女の声で「お母さんが死ぬよ」と聞こえてきた。すると兄から電話がかかってきた。父のときは、棺に入れる花が夢に出てきて、死を知らせてきた。 	<p>3人(N,O,Q)は現在を重視する傾向を示すが、過去と未来の捉え方が異なる。未来と過去を同じように重視するのがNさん。過去を重視するのがOさん。未来を重視するのがQさん。過去を最も重視するPさんは、94歳であり未来はないという。</p> <p>Mさんは、時々に合わせて身を任せてきたので、そのような時間認識はないという。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>M: 過去・現在・未来を意識することはない。 N: 現在>未来・過去 O: 現在>過去>未来 P: 過去>現在・未来はない Q: 現在>未来>過去</p>	<p>2人(N,P)が中景>近景>遠景となっており、自分や家族のこよりも地域や文化により関心が高い傾向を示す。</p> <p>近景に最も関心が高い人が2人(M,O)、重篤な病氣(がん)の経験を有する。</p> <p>遠景に最も高い関心を持つOさんは、海外ボランティアにも参加し、平和に過ごせる今の生活に幸福を感じている。</p> <p style="text-align: center;">↑</p> <p>M: 近景あつての中景 N: 中景>近景>遠景 O: 遠景>中景>近景 P: 中景>近景>遠景 Q: 近景>中景>遠景</p>

2. 分析

2.1 事例分析

本節では、2次元のマトリックス表および表2を用い、3つの類型ごとに事例分析を行った結果について述べる。ここでの内容として第1は、量的データとして収集された背景変数（属性等）、および老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感の下位尺度得点⁸について類型ごとに整理を行い、クラスター分析の結果（N=237人の全体平均）と比較すること。第2は、12項目のコード（概念的カテゴリー）ごとに、類型ごとの特徴を集約して記述することである。なお、類型の属性（…SWB・…東洋的見方群）としては、クラスター分析で用いたものをそのまま当てているが、これは、主観的幸福感と東洋的見方を基準変数として類分けした結果であり、以降で明らかとなるように、質的データと組み合わせることによって、単なる2次元（主観的幸福感と東洋的見方）では捉えきれない研究協力者の「生きざま」にかかわる意味深い側面が浮き出てくることに留意が必要である。

2.1.1 類型ごとの特徴

(1) 類型Ⅰ：低SWB⁹・低東洋的見方群（対象者¹⁰A～Fさん）

a. 量的データの分析

背景変数（属性等）¹¹ 対象者6人のうち性別は、男性1人・女性5人、平均年齢は85.8歳（範囲75—92歳）、配偶者は「あり」2人・「なし」4人、教育歴は「中等教育」2人・「高等教育」4人である。活動性については、交流頻度は8.5人／月、活動性指標は11.0、健康度は「健康」4人・「不健康」2人、暮らし向きは6人とも「普通」、重篤な病気の経験は6人のうち3人が「あり」となっている。

老年的超越¹² 図2に示すように、男性84歳のDさん以外は、クラスター1（n=81人）の平均得点（36.08）および全体平均（38.80；N=237人）よりも高い。この点はクラスター分析の結果（老年的超越平均得点に関してクラスター1は低位；以下、類型Ⅱ、類型Ⅲの記述では「…に関して」を略す）とは異なる。

東洋的見方¹³ 図3に示すように、女性92歳のAさん、男性84歳のDさん以外は、クラスター

⁸ 事例分析およびコード分析では、老年的超越と東洋的見方の得点として下位尺度の単純加算値を指標に用いたが、老年的超越については、増井他（2019）の研究でも8つの下位尺度の合計点が用いられている。

⁹ Subjective well-being（主観的幸福感）の略語で、本研究では測定にPGCモラル・スケールを用いた。

¹⁰ 対象者（17人の研究協力者をID記号で表示）は、量的研究のクラスター分析の結果にもとづき3つの類型に分類されている。

¹¹ 個別のデータは添付していないが、性別・年齢については、本文および図5～図7に示している。

¹² 量的研究での考察にもとづき、6つの下位尺度（ありがたさの認識、内向性、宗教・スピリチュアル、基本的肯定感、利他性、無為自然）を用いた。

¹³ 量的研究での考察にもとづき、「〈老い〉に対する東洋的態度」の5つの下位尺度（〈老い〉の知恵、自然への親近感、〈老い〉の深まり、内面への旅、不二性）を用いた。

1の平均得点（39.98）より高いが、全体平均（42.89）との比較では、女性88歳のEさんがわずかに下回っており、クラスター分析の結果（東洋的見方平均得点に関してクラスター1は低位；前掲）とおおむね合致する。

主観的幸福感 図4に示すように、女性75歳のBさん以外はクラスター1の平均得点（8.49）より高いが、全体平均（12.41）との比較では、Bさんに加えて女性92歳のAさん、男性84歳のDさん、女性88歳のEさん、女性88歳のFさんが低い値となっており、クラスター分析の結果（主観的幸福感平均得点に関してクラスター1は低位；前掲）とおおむね合致する。

b. 質的データの分析

生きた時代 70歳代が1人、80歳代が4人、90歳代が1人であるが、この人たちにとって、少年・少女時代は軍国教育一色で、外来語が禁止されるなど楽しい思い出は何もない。戦時中は女学生も勤労働員され、また、88歳女性のEさんは、子供が目の前で機関銃で殺されるのを目撃するなど空襲や爆撃の恐怖も体験した。92歳女性のAさんは、終戦直後は厳しい食糧難で食べるものがなく、野草のようなものまで食材として摘みにいった記憶がある。そんな時代でも、あるところには（食べ物がある）もので世の中の不公平さ・理不尽さを感じたと話す。また84歳男性のDさんは、戦後は精神文化が否定され行き過ぎもあったが、科学的になり世の中が明るくなった印象もあったと話す。

青年時代以降は、6人全員が職業（商売、医院手伝い、宗教人、公務員、教員）に従事しており、うち5人（B,C,D,E,Fさん）は、現在でも積極的に地域活動にも関わりをもっている。

生きた時代を振り返ってみて、全員共通して話すのは、「戦争は絶対ダメ。こんな時代はもうコリゴリ」との思いである。

幸福観 4人（A,B,C,Dさん）は、家族や友人、居住している地域の人たちとの良き人間関係に幸福を感じている。また88歳女性のFさんは、ありのままの自分を見せることができるようになったという自己解放感に幸福を感じている。この点は、老年的超越理論の3つの次元¹⁴のうち「社会と個人との関係の次元」に含まれる〈社会的因習からの決別〉に通じる。

性格・自己観・人間観等 6人全員、対人関係では外向的な態度が強く出ているように思われるが、その陰には内向的な態度（自己の内面へと向かう意識の変化）が隠れているようにもみえ、単純な二元化には注意が必要である¹⁵。特に88歳女性のFさんは、「自由に育ったため人の気持ちがわからなかった。この歳になって人間は生かされているということをしみじみと思うようになった」と話す。この点は、老年的超越理論の「自己の次元」に含まれる〈自己との向き合い〉や、JGS-Rの下位次元に含まれる「宗教もしくはスピリチュアルな態度」に通じる。また、宗教人の

*14 表1による。なお、本稿において「老年的超越理論の3つの次元」といえば、この表で整理したものを指す。

*15 ここでは本人の回答にもとづきタイプ分けを行っているが、ユングはすべての人が外向と内向、両方の資質を備えていると指摘している（河合，1967）。

88歳女性のCさんは、「人は自分で自分の欠点はわからない。人から言われて反省するもの」と話し、同じく88歳女性のEさんは、戦時中に出会ったある先生の印象に残る勇気ある振る舞いが、戦後教員となった自分の心の支えとなっていると話す。

無為自然 この言葉から連想される共通のイメージは、「あるがまま」「がんばらない」といったところであるが、84歳男性のDさんは、「がんばらないに共感はあるが、坊さんのような悟りは難しい」という。一方、宗教人の88歳女性のCさんは、「自然体もいいが、能動的に変えていくことが必要な場合もある」と考えている。学生時代に『老子』を勉強した88歳女性のFさんは、「老子はすべてを含んでいる。この点で孔子より老子に共感する」という。

自然・芸術に共感する心 6人全員、自然が好きで芸術的なことにも関心がある。88歳女性のCさん、84歳男性のDさんは、歳とともに芸術への共感力が増してきたという。また88歳女性のFさんは、若いときは演奏のテクニックに感動していたが、今は一生懸命に演奏しようとするその姿に感銘を受けるようになったという。この点は老年の超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる〈平凡にして深い知恵の獲得〉に通じる。

回想 84歳男性のDさんは、1歳の子供を亡くしたときのこと、また、親しい友人を亡くしたときのことを時々思い出すが、このような過去の回想は悲しいもので、未来志向的な回想をすることはないと話す。

人生の危機 6人のうち3人（A,C,Dさん）が、がんなどの重篤な病気を経験している。「人生の危機」ということでは、75歳女性のBさんは5歳の娘を亡くした経験、88歳女性のFさんは、子供が学術調査で滞在していたケニアでひき逃げに遭い、ロンドンで緊急手術をしたときの途方に暮れた経験を話した。また、宗教人の88歳女性のCさんは、がんによる手術で障がい者になったことで人の助けを借りるようになり、おかげさまを実感するようになったと話す。なお、92歳女性のAさんは、（家族によると）2回の大手術を経験しているにもかかわらず、今はそのことを思い出せない。

無常観・死生観 無常観については、3人（B,D,Fさん）が共感を示す。死生観については、宗教者の88歳女性のCさんは「死んだら仏になる。人は神仏の加護により助けられている」と明快であるが、88歳女性のFさんは、「まだ死を受け入れてはいない。生きていることに感謝している」と話し、魂は残された人の記憶に残るので「ちゃんと生きなければ」と考えている。84歳男性のDさんは、「風にそよぐ葦」のような生き方をしてきたので今さら人生観は変わらないと話す。また92歳女性のAさんは、「死は誰にでも訪れるもので受け入れるよりしょうがないが、あの世はどんな所かわからないので不安だ」と話す。

宇宙的感觉（命の連鎖） 4人（A,B,D,Fさん）が、一体性（母性的な愛）の象徴として例示した「月」に親近感を覚えると答えた。二元性（光と闇）の象徴として例示した「太陽」に親近感を覚えると答えた人はいなかった。宗教者の88歳女性のCさんは、「神は宇宙に存在するもので、自分には宇宙に包まれている感覚がある」と話す。88歳女性のFさんも、「人間は宇宙の一員で一体のもの」と考えている。この2人（C,Fさん）は、地上と宇宙を時空の連続体と捉え

る東洋的な宇宙観をもっている。

共時的体験（夢と現実の一致） このような体験を有するのは、6人のうち88歳女性のFさんのみである。「息子がケニアで事故に遭う前々日に赤ちゃんになっている夢をみた。3日後に事故の知らせがきた。偶然には意味があると思っている」と話す。

時間認識 簡易なサークル・テストを実施した結果、サークルの大きさでは、3人（C,D,Fさん）は、現在>過去>未来と、「現在」を重視する傾向があり、次いで「過去」、遠い「未来」のことはわからないという。92歳女性のAさんは軽い認知症の症状があり、（近い）過去や現在のことについても記憶に残っていないという。ましてや未来のことを考えることはない。また75歳女性のBさんは、過去・現在・未来は連続的なもので、それぞれに「境」はないという。この点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈時間定義の変化〉に通じる。

空間認識 簡易なサークル・テストを実施した結果は、92歳女性のAさんを除いて4人（B,C,D,Fさん）は、「中景」（地域や文化）を重視する傾向があり、次いで「近景」（自分や家族）、「遠景」（神仏や宇宙）は「近景」と同程度、または「近景」より小さい。この4人は、現在も地域活動に関わりをもつ人たちである。「近景」と「遠景」が同程度と答えた2人（C,Dさん）とFさんは、宇宙における魂の存在を肯定する（否定はしない）。

まとめ

6人（男性1人、女性5人）の平均年齢が85.8歳と3つの類型のなかでは一番高い。**老年的超越**に関しては、クラスター分析の結果（クラスター1は低位）とは異なるが、6人のうち5人が女性であること、年齢が1人を除いて80歳以上であることによるものであろう。**東洋的見方**に関しては、クラスター分析の結果（クラスター1は低位）と大きくは変わらない。**主観的幸福感**に関しては、類型Ⅰの得点が総じて低いのはクラスター分析の結果（クラスター1は低位）ともおおむね合致するが、インタビュー時の印象からすると、3人（B,E,Fさん）の得点が低いのは実態と大きく乖離しているように感じられる。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、類型Ⅰの年齢幅が75—92歳と広いことなどから、その特徴を一括りで表すことは難しいが、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のものである。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は軍国教育一色で楽しい思い出はなく、終戦直後の厳しい食糧難を経験していること、②全員職業に就いていたこと、③困難な時代を生き延びてきた逞しさがあること、④戦争は絶対ダメとの強い思いをもっていること、⑤今でもボランティア等で社会と関わりをもっていること——である。

幸福観については、家族や友人、地域の人たちとの良き人間関係を挙げる人が多い。Fさんのように自己解放感を挙げる人もあり、老年的超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる〈社会的因習からの決別〉に通じる。

性格・自己観・人間観等については、外向的な側面が強く出ているが、Fさんの「この歳になっ

て人間は生かされていると感じる」という点は、老年的超越理論の「自己の次元」に含まれる〈自己との向き合い〉や、JGS-Rの下位次元を構成する「宗教もしくはスピリチュアルな態度」に通じる。

無為自然の共通するイメージは「あるがまま」「がんばらない」であるが、Cさんのようにポジティブな捉え方をする人もいる。

6人全員、自然が好きで芸術的なことにも関心があり、歳とともに芸術への共感力が増してきた。Fさんは、演奏のテクニックより一生懸命に演奏しようとする姿に感銘を受ける。老年的超越理論の「社会と個人との関係の次元」に含まれる〈平凡にして深い知恵の獲得〉に通じる。

Dさんは、子供や親しい友人を亡くしたときのことを時々思い出すが、未来志向的な回想をすることはしない。

3人が、がんなどの重篤な病気を経験している。特にCさんは、自身が障がい者になったことで、おかげさまを実感するようになった。Bさんは5歳の娘を亡くした経験、Fさんは子供がケニアでひき逃げに遭い途方に暮れた経験をもつ。ほぼ全員が何らかの人生の危機を経験している。

3人が無常観に共感を示すが、死生観については個々人で異なる。Cさんは「死んだら仏になる」と明快であるが、Fさんは「魂は残された人の記憶に残るので、ちゃんと生きなければ」と考えている。Aさんは、死を受け入れつつも未知なるが故の不安を覗かせる。

4人が「月」に親近感を覚えたが、「太陽」に親近感を覚える人はいない。Cさんは「自分は宇宙に包まれている」、Fさんも「人間は宇宙の一員で一体のもの」と感じており、この2人は東洋的な宇宙観をもっている。

時間認識については、3人は「現在」を重視する傾向があり、次いで「過去」、遠い「未来」のことはわからない。Bさんの「過去・現在・未来は連続するもので境はない」との考え方は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈時間定義の変化〉に通じる。

空間認識については、4人は「中景」（地域や文化）を重視する傾向があり、次いで「近景」（自分や家族）、「遠景」（神仏や宇宙）は「近景」と同程度か、または「近景」より関心が低い。「近景」と「遠景」が同程度と答えた2人（C,Fさん）は、東洋的な宇宙観をもち魂の存在を肯定する。

（2）類型Ⅱ：中SWB・高東洋の見方群（対象者G～Lさん）

a. 量的データの分析

背景変数（属性等） 対象者6人のうち性別は、男性3人・女性3人、平均年齢は83.8歳（範囲79—94歳）、配偶者は「あり」3人・「なし」3人、教育歴は「中等教育」3人・「高等教育」3人である。活動性については、交流頻度は13.8人／月、活動性指標は12.3、健康度は6人全員「健康」、暮らし向きは「普通」5人・「ゆとりあり」1人、重篤な病気の経験は6人のうち2人が「あり」となっている。

老年的超越 図2に示すように、女性94歳のHさん以外はクラスター2（n=79人）の平均得点（42.62）を下回っている。また、全体平均（38.80；N=237人）との比較でも、男性81歳

のJさん、男性79歳のKさん、女性82歳のLさんは下回っており、このことはクラスター分析の結果（クラスター2は高位）とは異なる。

東洋の見方 図3に示すように、女性94歳のHさん、女性81歳のIさん、女性82歳のLさんは、クラスター2の平均得点（49.32）より高い。全体平均（42.89）との比較では、加えて男性86歳のGさん、男性81歳のJさんの得点が高い。男性79歳のKさん以外は総じて得点が高く、このことはクラスター分析の結果（クラスター2は高位）と合致する。

主観的幸福感 図4に示すように、男性86歳のGさん、女性94歳のHさん、女性81歳のIさんは、クラスター2の平均得点（13.73）より高い。全体平均（12.41）との比較では、加えて男性81歳のJさんの得点が高い。6人の得点のバラツキは大きいですが、傾向としてはクラスター分析の結果（クラスター2は中位）と合致する。

b. 質的データの分析

生きた時代 70歳代が1人、80歳代が4人、90歳代が1人であるが、少年・少女時代は戦争一色で、3回目の出征となる父親との寂しい別れを経験した人（Lさん）、釜山からの引き揚げで魚雷の恐怖を経験した人（Iさん）、また、農村でも労働力不足でとにかくよく手伝わされたと話す人もいた（J,Kさん）。94歳女性のHさんは、女学校が終わってすぐに女中に出され、その後も父に言われるまま農家に嫁入りし大家族の下で苦勞した経験話す。

終戦直後は厳しい食糧難で食べるものに苦勞したが、81歳男性のJさんは、ある種の解放感もあったという。戦争が終わって子供も生まれ、ようやく自分の人生が実感できるようになって両親に感謝しているという81歳女性のIさん、英語教員になるため大学の英文科へ進学した86歳男性のGさん、これからの時代は女性も手に職をと看護学校へ進んだ82歳女性のLさん。これらの人たちは、いわゆる戦後の民主主義教育を体験した人たちである。

青年時代以降は、6人全員が職業（教員、農業、公務員、会社員、看護師）に従事しており、うち2人（H,Jさん）は現在でも積極的に地域活動に関わりをもっている。

生きた時代を振り返ってみて共通して話すことは、「戦争はもうコリゴリ、嫌な思い出ばかり」。82歳女性のLさんは、自分が経験した戦争の悲惨さを孫にきっちりと伝えておくことが大切だという。また、94歳女性のHさんは80歳になったとき、戦争を経験した者の一声が必要と思っ「女性の会」を立ち上げ活動を始めた。

幸福観 3人（H,I,Jさん）は、健康でこの歳まで生きてこれたことに感謝（十分に生きた）しつつ、時々の状況に柔軟に対処していくことで生の充実感を感じている。また3人（J,K,Lさん）は、気の置けない仲間や思いを同じくする同好の士との交流に喜びを感じている。特に82歳女性のLさんは看護師としての仕事を無事に勤め上げたことに幸福を感じている。ほぼ全員、今が一番幸せだという。

性格・自己観・人間観等 外向的な人（H,Lさん）は、自分軸が振れることなく相手の立場に立って考える傾向がみられる。内向的な人（I,Jさん）は、周りをよく見て状況に応じて自分軸

をしなやかに変化させていく。86歳男性のGさんのように、悟りに近い死生観（死は天命）をもつ人もいる。

無為自然 この言葉のイメージは、「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」（H,I,J,Lさん）。94歳女性のHさんは、「自然の力に比べれば、人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない」と達観している。

自然・芸術に共感する心 自然を好み芸術に関心をもつ人が多い。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じるという94歳女性のHさん。歳とともに芸術的なものへの共感力が増してきた84歳男性のGさん。若い頃は洋楽に関心があったが、今は日本的なものの方が気持ちが落ち着くという81歳女性のIさん。82歳女性のLさんは、お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景が蘇ってきて心が動かされると話す。これらの点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈神秘性の気づき／宇宙との一体感〉に通じる。

回想 過去回想が主であるが、94歳女性のHさんは子供の頃の楽しい思い出、81歳女性のIさんは忘れたいが苦しかったこと、81歳男性のJさんは過去を回想したところで今さら戻れないという。82歳女性のLさんは、「戦争で苦しかった時代があったことを孫に伝える」と話しており、未来志向的な回想といえる。

人生の危機 重篤な病気を経験した人は2人（H,Kさん）だが、ともにこのような危機の経験により人生観が変わったという。94歳女性のHさんは、健康のありがたみを実感し氏神さんに参ることが以来日課になっている。79歳男性のKさんは、完治後3年かけて四国霊場巡りを行人人生観がプラスの方向に変化したという。

無常観・死生観 5人（G,H,I,J,Lさん）は、「死は天命」として受け入れられる（あるいは、受け入れられると思う）と話し、どこか恬淡としたところがある。少年・少女時代とはいえ、この人たちの戦争経験が背景にあるのかもしれない。94歳女性のHさんは、「死ねば形はなくなるが、他者とつながる魂の存在は感じる」と話す。この点は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈世代間のつながりの認識〉に通じる。

宇宙的感觉 「月」に親近感を覚える2人のうち、94歳女性のHさんは、自分の人生が投影されているように感じ、81歳男性のJさんは、その神秘性に惹かれ夜空を見上げることが多くなったという。「太陽」に親近感を覚える2人のうち農業を営む81歳女性のIさんは「太陽とともに生きている」と話し、82歳女性のLさんは「太陽は生き生きとしており、その光と影に惹かれる」という。84歳男性のGさんは東洋的な宇宙観をもっており、94歳女性のHさんは、「太陽」を宇宙の象徴として捉えている。

共時的体験（夢と現実の一致） 6人のうち共時的体験を有する人はいない。

時間認識 おおむね今をどう生きるかに関心があり、サークルの大きさでは「現在」を重視する傾向があるが、「過去」については評価が分かれる。「過去」を最も重視しているのは81歳女性のIさん、82歳女性のLさんは「現在」と同レベルに関心があり、今さら戻れないので見ないようにしているのは81歳男性のJさん。「未来」については、3人（I,J,Lさん）とも関心が低い。

84歳男性のGさんは、時間（過去・現在・未来）の実体は「無」と東洋哲学的な捉え方をしている。

空間認識 サークルの大きさでは、3人（I,K,Lさん）が近景>中景>遠景となっており、自分や家族のこと（近景）について最も関心が高く、次いで、地域や文化（中景）、神仏や宇宙（遠景）については関心が低い。「中景」に最も関心が高い2人（H,Jさん）は、地域との関わりが深い人たちである。

まとめ

対象者6人（男性3人、女性3人）の平均年齢が83.8歳と3つの類型の中では一番低い。**老年的超越**に関しては、クラスター分析の結果（クラスター2は高位）とは異なる。4人の年齢が80歳前後と比較的若いことが関係している可能性が考えられる。**東洋の見方**に関しては、クラスター分析の結果（クラスター2は高位）と合致する。**主観的幸福感**に関しては、6人の得点のバラツキは大きいですが、傾向としては3つの類型のうち中間にありクラスター分析の結果（クラスター2は中位）と合致する。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のようになるであろう。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は戦争で過酷な体験をしていること、②80歳前後の4人は、いわゆる民主主義教育を体験していること、③戦後、結婚、進学など、それぞれの道を自ら選択し歩き始めたこと、④全員仕事に就き、2人は現在でも地域活動に関わりをもっていること、⑤「戦争はもうコリゴリ」との思いが強く、戦争の悲惨さを子孫や地域の女性に語り継ぐ活動をしていること——である。

幸福観については、健康でこの歳まで生きられたことに感謝（十分に生きた）しつつ、生の充実感を感じている。仲間や思いを同じくする同好の士との交流に喜びを感じている人。仕事を無事に勤め上げたことに幸福を感じている人など、ほぼ全員が「今が一番幸せ」だという。

性格・自己観・人間観等ということでは、外向的な人は自分軸が振れることなく、内向的な人は状況に応じて自分軸をしなやかに変化させていく。悟りに近い死生観（生即死、死即生）をもつ人もいる。

無為自然から連想される共通のイメージは、「なるようになる」「がんばり過ぎない」「成り行きに任せる」。Hさんは「自然の力に比べれば人間の力はしれたもので、自分だけあがいてみても何もできない」と達観している。

自然を好み芸術に関心をもつ人が多い。歳とともに芸術的なものへの共感力が増している。木や花など身近な自然との対話に喜びを感じる人。西洋的なものより日本的なものの方が気持ちが落ち着くという人。お気に入りの詩集を読み返すと、その頃の情景が蘇ってきて心が動かされるという人。これらの事象は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈神秘性の気づき／宇宙との一体感〉に通じる。

回想については、子供の頃の楽しい思い出や、忘れたいが苦しかったことなど、過去回想が主

である。なかにはLさんのように「戦争で苦しかった時代があったこと、戦争は絶対にはいけないことをきちっと孫に伝えておく」と、未来志向的な回想をする人もいる。

H、Kさんは、重篤な病気を経験（**人生の危機**）したことで人生観が変化した。**無常観・死生観**については、「死は天命」として受け入れられる（あるいは、受け入れられると思う）と恬淡としたところがある。「死ねば形はなくなるが、他者とつながる魂の存在は感じる」（Hさん）と話す人もあり、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈世代間のつながりの認識〉に通じる。

農業を営むIさんは、「太陽」をエネルギーの象徴として捉えている。Gさんは「宇宙は陰陽が関係している」と**東洋的な宇宙観**をもつ。

時間認識については、「現在」を重視する傾向がみられるが、「過去」については評価が分かれる。「過去」を最も重視しているのはIさん、Lさんは「現在」と同レベルで関心がある。「未来」については関心が低い。Gさんは、時間（過去・現在・未来）の実体は「無」と東洋哲学的な捉え方をしている。

空間認識については、自分や家族のこと（近景）について最も関心が高く、次いで、地域や文化（中景）、神仏や宇宙（遠景）については関心が低い。「中景」に最も関心が高い2人（H、Jさん）は、農村地域に住み地域との関わりが深い人たちである。

（3）類型Ⅲ：高SWB・低東洋の見方群（対象者M～Qさん）

a. 量的データの分析

背景の変数（属性等） 対象者5人のうち性別は男性3人・女性2人、平均年齢は85.6歳（範囲81—92歳）、配偶者は「あり」4人・「なし」1人、教育歴は「中等教育」2人・「高等教育」3人である。活動性については、交流頻度は11.6人／月、活動性指標は12.8、健康度は「健康」4人・「不健康」1人、暮らし向きは「普通」4人・「ゆとりあり」1人、重篤な病気の経験については、5人のうち4人が「あり」となっている。

老年的超越 図2に示すように、男性92歳のPさん以外はクラスター3（n=77人）の平均得点（38.00）および全体平均（38.80；N=237人）を上回っている。特に女性86歳のOさん、男性87歳のQさんの得点が突出している。Pさんを除くと傾向としてはクラスター分析の結果（クラスター3は中～低位）とおおむね合致する。

東洋の見方 図3に示すように、女性86歳のOさん、男性92歳のPさんは、クラスター3の平均得点（39.34）および全体平均（42.89）より高い。この2人以外はクラスター分析の結果（クラスター3は低位）とおおむね合致する。

主観的幸福感 図4に示すように、女性82歳のMさん、女性86歳のOさん、男性92歳のPさんは、クラスター3の平均得点（15.16）より高い。全体平均（12.41）と比較しても5人全員の得点が高い。この傾向はクラスター分析の結果（クラスター3は高位）と合致する。

b. 質的データの分析

生きた時代 80歳代が4人、90歳代が1人であるが、少年・少女時代は戦争一色で、内地では空襲・爆撃の恐怖を経験。そんな時代でも外地（上海）にいた82歳女性のMさんは、生活は裕福であったという。しかし、引き揚げ後の生活は食糧難等で苦勞し、病気のため高校進学を断念。92歳男性のPさんは、天皇のために死ぬことも覚悟していたが、戦後巷では簡単に戦争批判がなされ世間の変わり身の早さに違和感を覚えたという（87歳男性のQさんも同じ）。戦後、海外への渡航が認められるようになり86歳女性のOさんは、好きな洋裁を学ぶため単身アメリカに渡った。

青春時代以降は、5人全員が職業（会社員、公務員、障がい者施設職員、研究者）に従事しており、Oさんは海外ボランティアとして、Pさんは博物館での英語ボランティアを経て現在は地元で「居場所」を運営しており、積極的に地域活動にも関わりをもっている。

振り返ってみて、5人全員「あんな時代はもうコリゴリ」という。Mさんは、戦後の厳しい時代のことを思えば少々のは辛抱できると話す。

幸福観 5人（M,N,O,P,Qさん）は、戦争が終わって自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことに充実感を感じると話す。82歳女性のMさんは、健康で束縛なく好きな時間を過ごせる今は一番幸せという。81歳男性のNさんは、かつての仕事仲間との人間関係に、87歳男性のQさんは、妻子が近くにいてくれることに、92歳男性のPさんは、自著が今も業界のテキストとして使われていることに、それぞれ幸せを感じている。86歳女性のOさんは、若い頃に夢を実現させた米国での生活、親しいボランティア仲間、日々平和に過ごせることに幸せを感じると話す。

性格・自己観・人間観等 おおむね外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない（M,O,Pさん）。若いときには内向的であった人（O,Pさん）が様々な人生経験を積むなかで外向的に変化してきたのが特徴である。87歳男性のQさんは、神仏の力に頼ることに懐疑的で、この考えが自分の人生観の背後にあると話す。

無為自然 82歳女性のMさんのイメージは「手術台に乗った気分」、若い頃『莊子』を愛読した92歳男性のPさんは「自然体」、87歳男性のQさんは「無理に頑張らない」を挙げる。86歳女性のOさんは「できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく、それで十分」だという。この人たちに共通するイメージは「あるがまま」ということなのであろう。

自然・芸術に共感する心 演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。わからんなりに、ほんやりと邦楽や洋楽を聴いているという92歳男性のPさん。老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈神秘性の気づき〉に通じる。

回想 過去回想が主で、86歳女性のOさんは意識的に楽しかったことを思い出すようにしているが未来志向の回想はしない。92歳男性のPさんも子供の頃の思い出を折に触れ懐かしんでいる程度だという。87歳男性のQさんは、「過去のことを思い出しても今さらどうしようもない」と回想に意味を感じていない。

人生の危機 2人（M,Qさん）は、がんによる手術の経験があり、82歳女性のMさんは、ある種の覚悟ができており、今を生きることを楽しんでいる。87歳男性のQさんは、術後30年近くになるが、再発もなく医者が驚いているという。

無常観・死生観 死生観については、4人（M,O,P,Qさん）それぞれに違いがあるが、「死んだら『無』になる」という82歳女性のMさん、「好奇心というものがありこの世の行く末を見届けたい」という92歳男性のPさん、「ぼちぼち神仏に頼ることも考えなければ」という87歳男性のQさん。いずれも、寿命が至れば死も受容できるだろうという態度はおおむね共通している。

宇宙的感觉 「月」に親近感を覚える人は2人（O,Qさん）、87歳男性のQさんは「静」をイメージするが、「月」に母性愛を感じることはないという。2人（M,Nさん）は「太陽」に親近感を覚える。東洋的な宇宙観をもつ人はいないが、92歳男性のPさんは、身近な経験として、見えないものの気配（一人にいるときに、ふと肩をたたかれるような錯覚）を感じることもあるという。

共時的体験（夢と現実の一致） このような体験を有するのは86歳女性のOさんのみである。Oさんは、父の死も母の死も事前に夢で知ったという。「母のときは、華やかな花の夢をみた。女性の声で『お母さんが死ぬよ』と聞こえてきた。すると兄から電話がかかってくる。父のときは、棺に入れる花が夢に出てきて、死を知らせてきた」。これは、ユングのいう「意味のある偶然の一致」であり共時性といわれる現象である（河合，1967，pp.240-241）。「意味のある偶然の一致」には元型的なものが関連しており、情動的な因子が重要な役割を果たしているとされる（Jung & Pauli,1955 河合・村上訳 1976，pp.31-32）。Tornstam（2005）によれば、元型の現れ方は文化に依存するとされているが、Oさんの文化的な背景までは確認できていない。

時間認識 3人（N,O,Qさん）は「現在」を重視する傾向を示すが、「過去」と「未来」については捉え方が異なる。「未来」と「過去」を同じように重視するのが81歳男性のNさん、「過去」を重視するのが86歳女性のOさん、「未来」を重視するのが87歳男性のQさん。「過去」を最も重視するPさんは、92歳にもなればもはや「未来」はないという。82歳女性のMさんは、時々に合わせて身を任せてきたので、過去・現在・未来と区切るような時間認識はないという。この考え方は、老年的超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈時間定義の変化〉に通じる。

空間認識 2人（N,Pさん）が中景>近景>遠景となっており、自分や家族（近景）のことよりも地域や文化（中景）により関心が高い傾向を示す。「近景」に最も関心が高い人が2人（M,Qさん）いるが、重篤な病気（がん）の経験をもつ人である。「遠景」に最も高い関心をもつ86歳女性のOさんは、海外ボランティアにも参加し平和に過ごせることに幸福を感じている。

まとめ

対象者5人（男性3人、女性2人）の平均年齢は85.6歳と3つの類型の中では2番目に高いが、類型I（85.8歳）とほとんど変わらない。**老年的超越**に関しては、92歳男性のPさんを除いてクラスター分析の結果（クラスター3は中～低位）とおおむね合致する。Pさんの得点が突出し

て低いのは、Pさんが合理性を重視する工学系の元研究者であることが影響している可能性が高い。**東洋の見方**に関しては、女性86歳のOさん、男性92歳のPさん以外はクラスター分析の結果（クラスター3は低位）とおおむね合致する。**主観的幸福感**に関しては、5人全員の得点が高く、クラスター分析の結果（クラスター3は高位）と合致する。

コード（概念的カテゴリー）に関しては、共通項を軸にまとめると、おおよそ以下のようなであろう。

まず**生きた時代**である。おおむね共通するのは、①少年・少女時代は戦争一色、さらに戦後は厳しい食糧難を経験していること、②「あんな時代はもうコリゴリ」という切実な思いをもって、③全員が職業に就いていたこと——である。しかし、時代の感じ方はそれぞれに異なり、80歳代後半から90歳代の人は、④戦前は天皇のために死ぬことも覚悟していたが、戦後、世間の変わり身の早さに違和感を覚えた（P,Qさん）、⑤現役引退後、Oさんは海外ボランティアとして、Pさんは「居場所」の運営など地域活動とも関わりをもって、——である。

個々には幸福の対象は異なるが、戦争が終わって自由に生きられる世の中に変わり、自らの意志で人生を切り開いてこれたことに充実感を感じている：健康で束縛なく好きな時間を過ごせる今は一番幸せ（Mさん）。かつての仕事仲間との人間関係（Nさん）、妻子が近くにくれること（Qさん）、自著が今も業界のテキストとして使われていること（Pさん）、夢を実現させた米国での生活、ボランティア仲間、日々平和に過ごせること（Oさん）——など、それぞれの幸福観は多様である。

性格・自己観・人間観等ということでは、外向的な人が多く、物事に対して柔軟性があり固執しない。若いときには内向的であった人が人生経験を積むなかで外向的に変化してきたのが特徴である。

無為自然については、大病を経験したMさんのイメージは「手術台に乗った気分」、若い頃『莊子』を愛読したPさんは「自然体」、Qさんは「無理に頑張らない」。Oさんは「できなくなったことを嘆いてもしょうがない。できる範囲で楽しく」——共通するのは「あるがまま」ということなのであろう。

自然・芸術に共感する心については、演芸、音楽、アートを楽しむ人が多い。わからんなりに、ぼんやりと邦楽や洋楽を聴いているというPさん。これらは、老年の超越理論の「宇宙的次元」に含まれる〈神秘性の気づき〉に通じる。

回想については、楽しかったことや子供時代のことを時々思い出す程度で、未来志向の回想をする人は少ない。Qさんは、過去のことを思い出しても今さらどうしようもない、と回想に意味を感じていない。

人生の危機ということでは、がん手術の経験があるMさんは、ある種の覚悟ができており**今**を生きることを楽しんでいる。Qさんは、がんの手術後30年近くになるが、再発もない。「死んだら『無』になる」というMさん、「好奇心というものがあつたこの世の行く末を見届けたい」というPさん、「ぼちぼち神仏に頼ることも考えなければ」というQさん。いずれも、寿命が至れ

ば死も受容できるだろうという**死生観**はおおむね共通している。

「月」に親近感を覚える人は2人、「太陽」に親近感を覚える人も2人と分かれた。**東洋的な宇宙観**をもつ人はいないが、Pさんは身近な経験として見えないものの気配を感じることがある。

共時的体験（夢と現実の一致）を有するのはOさんのみである。Oさんは、父の死も母の死も事前に夢で知った。これは、ユングの共時性といわれる現象である。「意味のある偶然の一致」には元型的なものが関連しており、その現れ方は文化に依存するとされるが、Oさんの文化的な背景は確認できていない。

時間認識については、3人は「現在」を重視する傾向を示すが、「過去」と「未来」の捉え方が異なる。「過去」を最も重視するPさんは、92歳にもなればもはや「未来」はないという。Mさんは、過去・現在・未来と区切る時間認識はない。

空間認識については、2人（N,Pさん）が、自分や家族（近景）のことよりも地域や文化（中景）により関心が高い傾向を示す。「近景」に最も関心が高い2人（M,Qさん）は、重篤な病気（がん）の経験をもつ。「遠景」に高い関心をもつOさんは、海外ボランティアの経験があり、平和に過ごせることに幸福を感じている。

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 —「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

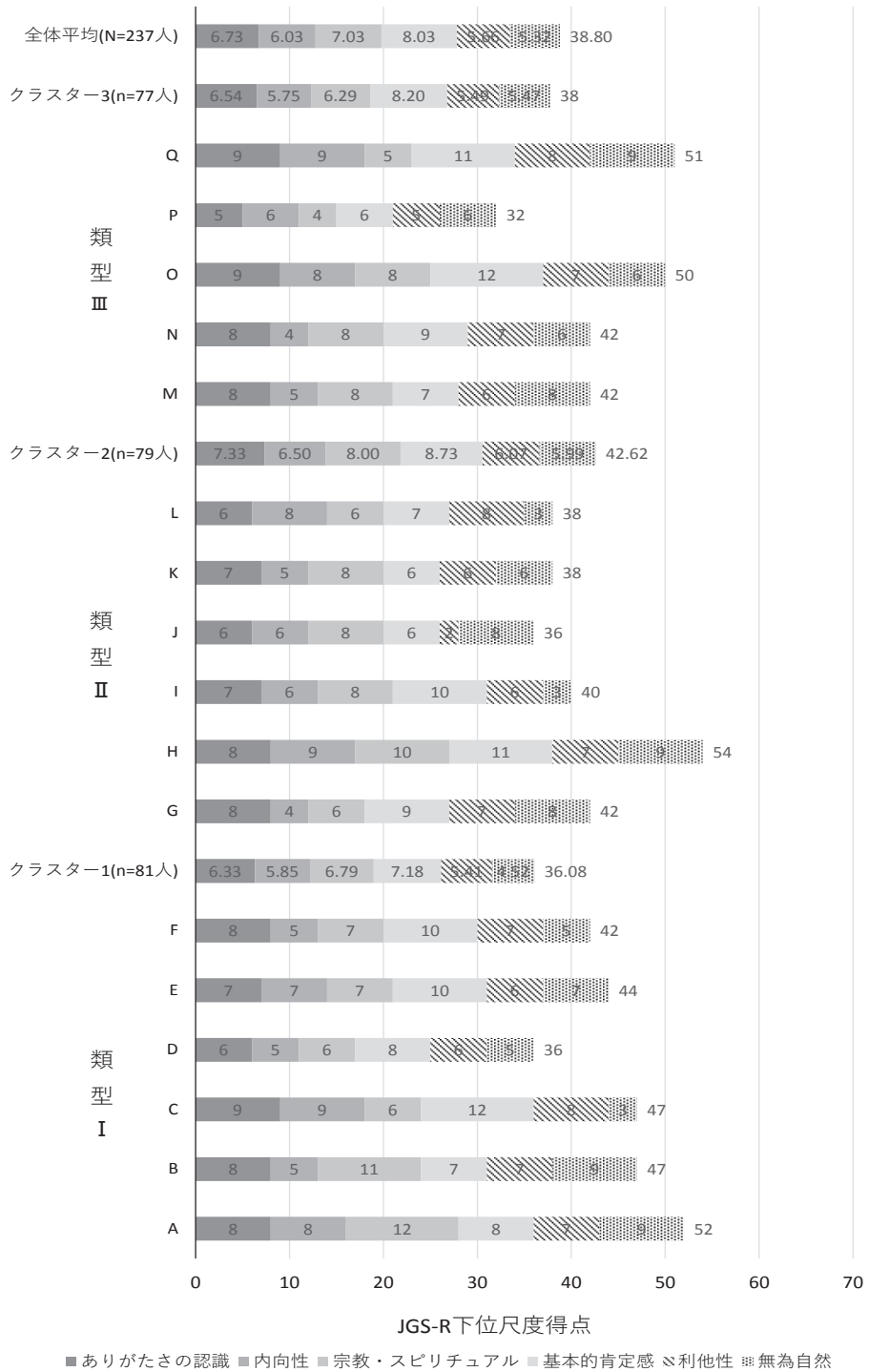


図2 老年的超越の構成要素の相対比較

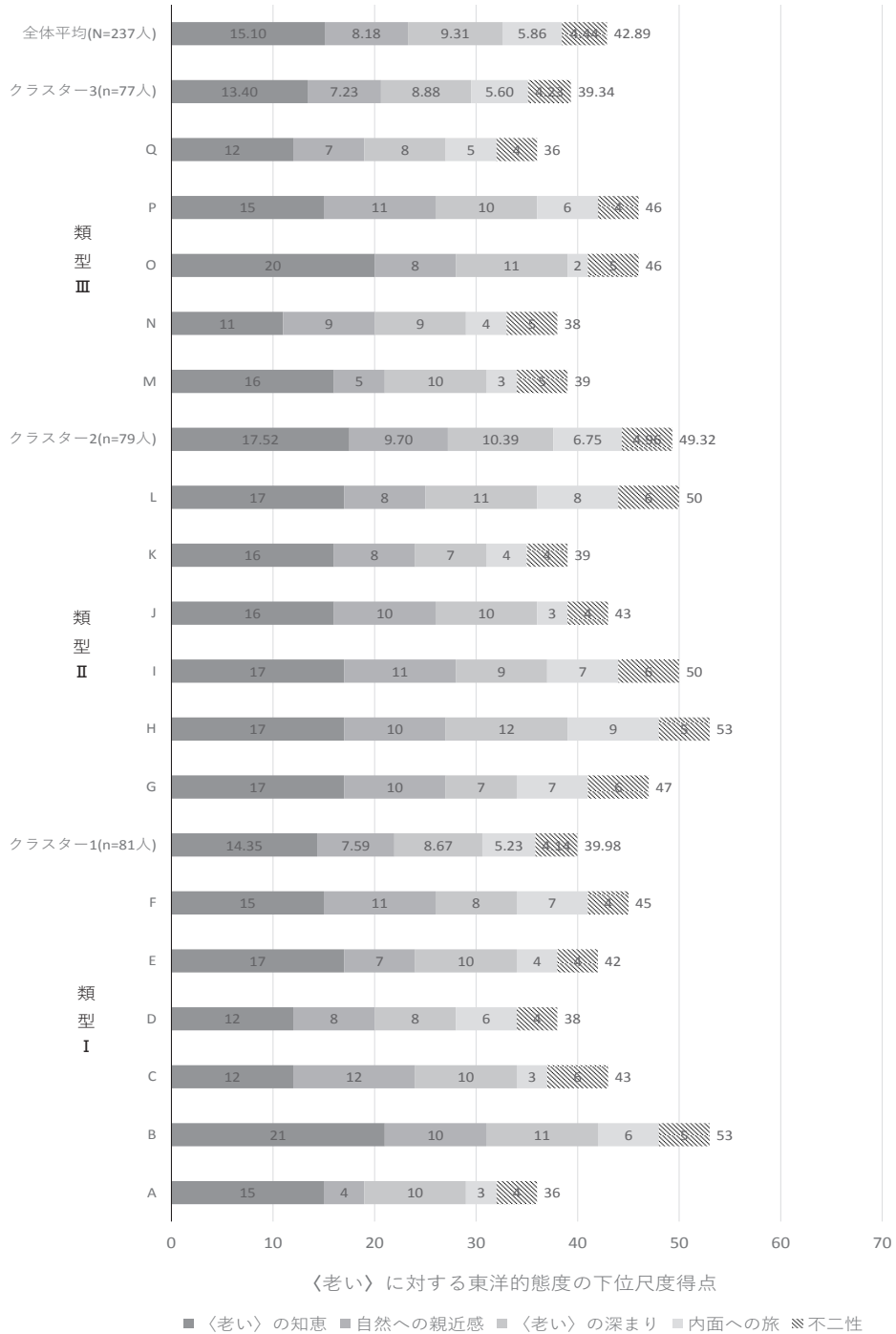


図3 東洋的見方の構成要素の相対比較

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 —「東洋的見方」が及ぼす影響を中心にして—

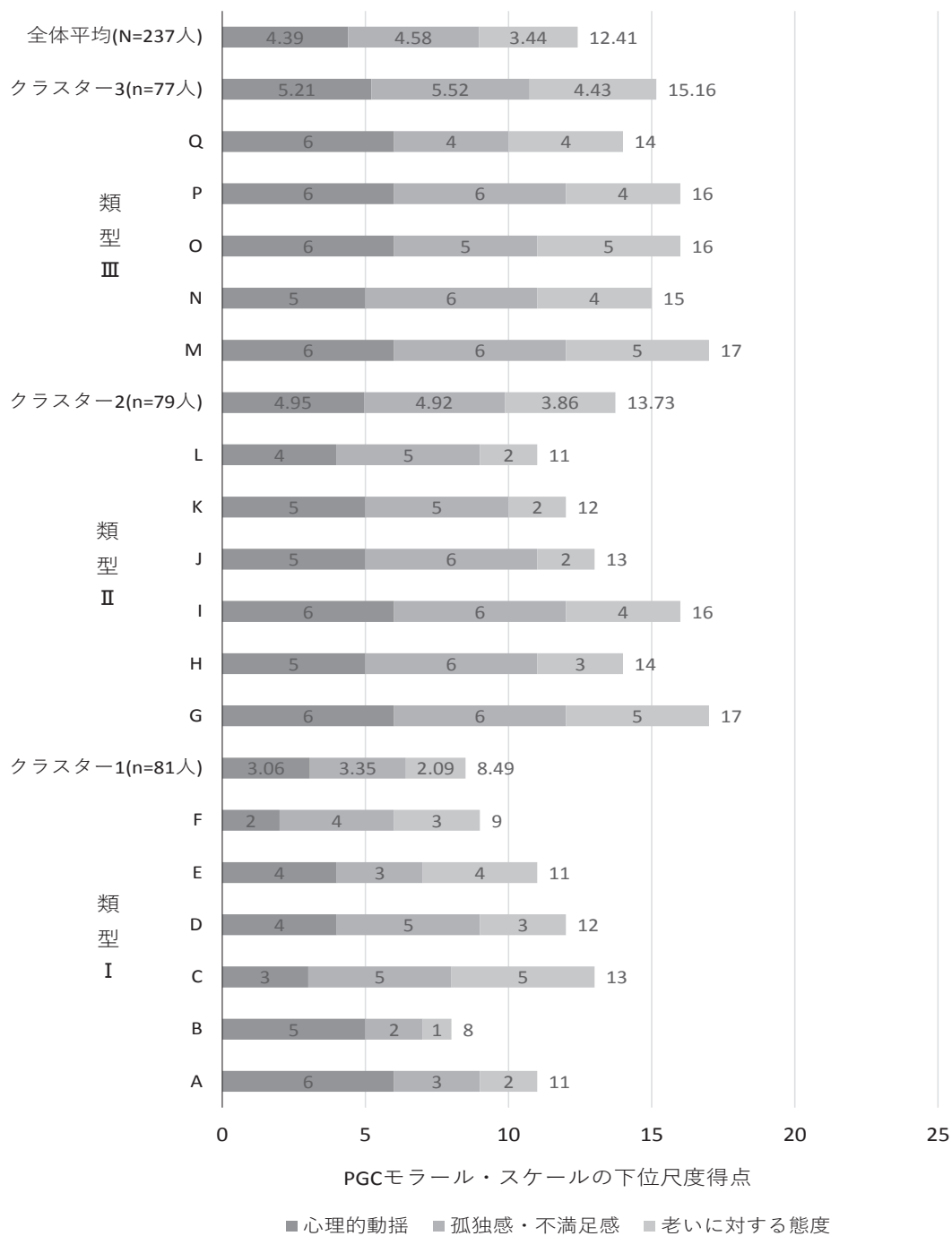


図4 主観的幸福感の構成要素の相对比较

2.1.2 年齢と老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感との関係

年齢と老年的超越、東洋的見方、主観的幸福感との関係については、類型ごとのサンプル数が各々少数であるため事例ごとの分析はそぐわないので、性別による違いに留意しつつ研究協力者17人全員の散布図から全体としての傾向をみることにする。

まず、年齢と老年的超越の関係（図5）であるが、2つの外れ値（75歳女性Bさん、92歳男性Pさん）はあるものの、女性では年齢の高い人は老年的超越得点も高い傾向が読み取れる。また、男性より女性の得点が高いといえるであろう。

次に、年齢と東洋的見方の関係（図6）であるが、両者の間に明らかな共変関係（年齢に対応した変化）は認められない。しかし性別ごとにみると、年齢にかかわらず女性のほうが男性より東洋的見方の得点が高いようにみえる。量的研究の関連要因分析における投入変数のt検定でも、東洋的見方に関しては、5つの下位尺度で女性の得点が男性より有意に高い結果となっている。

さらに、年齢と主観的幸福感の関係（図7）であるが、バラツキが大きく両者の間には共変関係はまったく認められない。特に、破線で囲った4人の女性（75歳Bさん、82歳Lさん、88歳E、Fさん）の得点が低いのは、インタビュー時の印象（地域やサークルでの活動に熱心に取り組んでおり、ポジティブで「生きがい感」が高い）とは大きく異なるものであった。この点に関しては、Ⅲ 総合的考察においても詳述する。

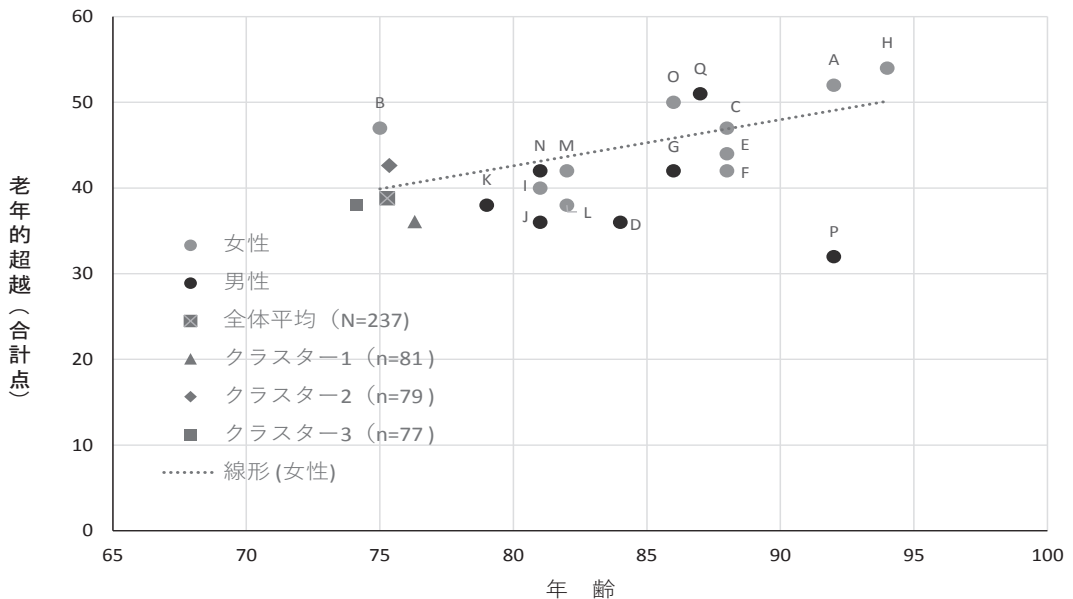


図5 年齢と老年的超越の関係

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 —「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

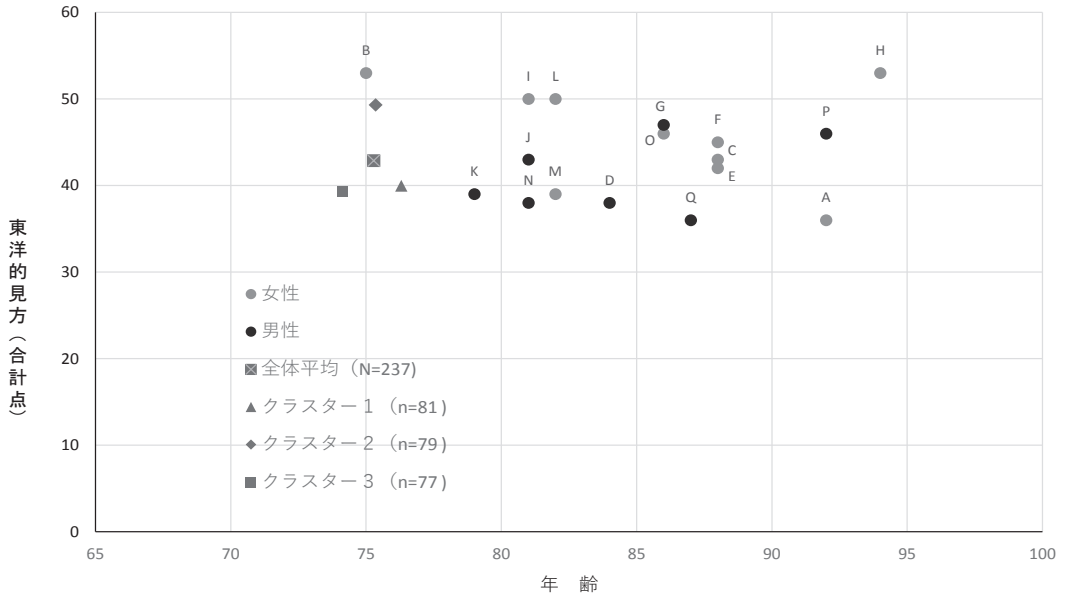


図6 年齢と東洋的見方の関係

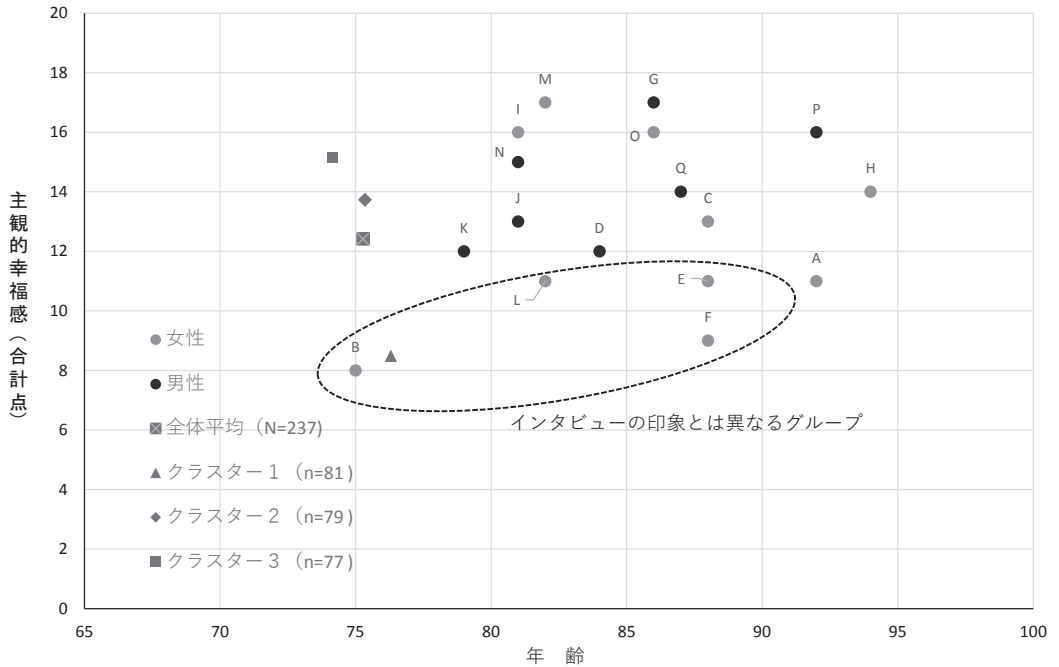


図7 年齢と主観的幸福感の関係

2.2 コード分析

前節の事例分析から明らかのように、たとえ5～6人程度の類型といえども個々人にはそれぞれの人生があり、所属する類型の特徴を安易に縮約してしまうと、情報価値の高い大事な発言を捨象してしまうおそれがあり弊害のほうが大きい。

したがってコード分析では、クラスター分析の結果の検証という側面よりも、個々の事例間の共通点や個別性に着目し、コード（概念的カテゴリー）が老年的超越を高める要因としてどのような働きをしているのかを分析することに照準を合わせることにした。

手順としては、まず、(1) 17人の老年的超越得点をクラスター分析の全体平均(38.80; N=237人)を指標に「中位以上／中位以下」に区分し、背景の変数（属性等）との関連を分析する。さらに、(2) 前記(1)の区分にもとづき、コード（概念的カテゴリー）を軸に個々人の発話内容（文書セグメント）の共通点・差異に着目し、「中位以上／中位以下」の特徴を記述する。

表3は、これらの分析結果を総括表で示したものである。なお、(1)にもとづく17人の研究協力者の分類は、同表下段の注記に示している。

以下では、老年的超越を高める要因を抽出するという観点から、男性については「中位以上／中位以下」の差異や共通点に着目し、また、女性については「中位以上」（全員^{*16}）の共通点に着目して述べる。

*16 Lさんは全体平均をわずかに下回っているが(-0.80)、老年的超越の考え方には肯定的な印象を受けたので「中位以上」に含めた。

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 —「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

表3 コード分析の総括表

	老年的超越の傾向			Tornstamの老年的超越理論 の低位次元との関連
	男性 中位以上(3人)	中位以下(4人)	女性 中位以上(10人)	
背景の変数（属性等）				
年齢	・全員80代	・70代1人、80代2人、90代1人	・70代1人、80代7人、90代2人	
配偶者	・「あり」2人、「なし」1人	・全員「あり」	・「あり」3人、「なし」7人	
活動性指標	・全体平均以上 2人	・全体平均以上 3人	・全体平均以上 8人	
健康度	・全員「健康」	・「健康」3人、「不健康」1人	・「健康」8人、「不健康」2人	
交流頻度	・全体平均以上 2人	・全体平均以上 2人	・全体平均以上 8人	
暮らし向き	・普通	・普通	・普通以上（ゆとりあり）2人	
重篤な病気	・「あり」2人、「なし」1人	・「あり」1人、「なし」3人	・「あり」6人、「なし」4人	
人生の危機	・全員「あり」	・「あり」2人、「なし」2人	・「あり」9人、「なし」1人	
コード（概念的カテゴリー）				
生きた時代	・少年時代は軍国教育、戦後の食糧難 ・「天皇の人間宣言」には違和感 ・戦後はある種の解放感（進学等） ・「戦争はもうコリゴリ」との思い ・リタイア後、地域活動に参加	・少年/青年時代は軍国教育・戦争 ・戦後の食糧難。価値観の激変。ある種の解放感 ・戦争は絶対ダメ。あの時代はコリゴリ ・リタイア後、地域活動に参加（2人）	・少女/青年時代の過酷な戦争体験 ・戦後の食糧難。民主主義教育を体験、女性なるが故の生き方、進路を選択 ・戦争は絶対ダメ。こんな時代はコリゴリ ・リタイア後、地域活動に参加（6人）	
幸福観	・「幸せ」の対象は個々人で共通 ・2人に共通：家族・友人関係など身近なことの中に「幸せ」を実感 ・文化を大事にできる今の生活	・「幸せ」の対象は個々人で共通 ・2人に共通：良き人間関係 ・自分らしく生きられればそれでよい。 ・戦前と違って自由に生きられること ・戦時中比べて便利になった生活	・「幸せ」の対象は個々人で共通 ・「子供の成長/健康/他者との関係/活動・生活/自己意識」；これらの項目は複合的に関連	
性格・自己観・人間関係等	・3人は外向的・楽天的 ・「生きることが死ぬこと、死ぬことは生きること」「神仏の方には懐疑的」「人との諍いを好まず」	・3人は外向的。内向的な人も対人関係には気を使う。 ・歳をとってから外向的になったという人；「フレキシブルになり、物事に固執しなくなった」	・全員外向的 ・歳を重ねるなかで意識が内面に向かうという人；「人間は生かされていると、しみじみ思う」	「自己の次元」 ・自己との向き合い 「社会と個人との関係の次元」 ・人間関係の意味づけの変化
無為自然	・「若い頃のようににはできない。無理して頑張る必要はない」	・ほぼ全員共感 ・イメージ：「頑張らない」「成り行きに任せる」「自然体」	・ほぼ全員共感 ・イメージ：「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張るすぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」	
自然・芸術に共感する心	・2人は、日本の自然に対する親近感。芸術的なことに関心あり	・2人は芸術的なことに関心を持つが、1人は関心希薄	・ほぼ全員が自然・芸術に共感 ・自然観はアニミズム的で東洋的 ・芸術の技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかに関心	「宇宙的次元」 ・宇宙の一体感 ・神秘性の気づき
回想	・3人も回想をしない。「過去を振り返っても、今さらどうしようもない」	・2人は、振り返り型の回想（時々） ・1人は、「今さら過去へは戻れない」と否定的	・3人は、振り返り型の回想（時々） ・1人は、「戦争記憶の孫への伝承」；未来志向型の回想	「宇宙的次元」 ・幼年時代への回帰 ・世代間のつながりの認識
人生の危機	・3人も「人生の危機」の経験（サジを投げていた医者を論す逞しさを持つ人も）	・2人は、「人生の危機」の経験（手術がきっかけで人生観がプラスの方向に変化）	・4人は、がんなどの重篤な病気を経験 ・2人は、子供に関わる危機（死、事故）を経験	
無常観・死生観	・3人に共通項は認められず； ・「生まれたものはすべて死ぬ」「歳をとったのでボケず神仏に頼らないかんのかも」「まだ、そこまでは考えていない」	・3人は「死」については恬淡で受容的 ・「病気を受け入れる覚悟はできている」「この世は仮の宿、縁があるだけ」「死ぬことはわかっているがこの世の行く末を見届けたい」	・無常観については、4人が共感 ・死生観については、5人が恬淡として受容的、他に「死んだら自分の生きざまや魂が残された人の記憶にどう刻まれるか」に関心	「宇宙的次元」 ・死生観の変化 ※無常観については東洋的
宇宙的感受（命の連鎖）	・80代；「インドの思想では、宇宙は陰陽が関係している」とする東洋的な宇宙観を持つ。	・「月」に親近感を覚えるのは2人 ・80代；「この世には人智の及ばないこともある」 ・90代；「ひとりのとき、ふと肩を叩かれたように感じることがある」	・「月」に親近感を覚えるのは4人 ・「太陽」に親近感を思えるのは2人 ・宇宙を地上との連続体と捉える東洋的な宇宙観を持つ人が2人	「宇宙的次元」 ・神秘性の気づき
共時的体験（夢と現実の一致）	・ない	・ない	・共時的現象の体験者（女性2人）は、「偶然には意味がある」と考えている。	
時間認識	・2人に共通；「現在」への関心が最も高く、次いで「過去」か「未来」 ・1人は、時間の実体は「無」と東洋的捉え方	・3人は「現在」をどう生きるかに関心が高く、「未来」への関心は低い ・「過去」については評価が分かれる。意識して「見ないようにしている」という人も。	・4人は、「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い（過去・現在・未来は連続するもので境はないと考える人も）	「宇宙的次元」 ・時間意識の変化 ・神秘性の気づき
空間認識	・1人は「近景」に、1人は「中景」に最も関心が高い。 ・「遠景」については、2人も関心が低い。	・3人は「中景」に最も関心があり、次に「近景」、「遠景」は関心が低い ・1人は、「近景」と「遠景」に同程度の関心	・3人は「近景」に、4人は「中景」に最も関心が高い。 ・「遠景」に最も関心が高い人は平和に過ごせることに「幸せ」を実感 ・「近景」「遠景」への関心が同程度の2人は、宇宙や魂の存在を肯定	「宇宙的次元」 ・神秘性の気づき 「社会と個人との関係の次元」 ・人間関係の意味づけの変化

注) 老年的超越の傾向欄の「中位」とは、クラスター分析の対象となった調査対象者（N=237人）の老年的超越得点（6要素合点）の平均値である。
 男性 中位以上(3人) : G(86歳)、N(81歳)、Q(87歳)
 男性 中位以下(4人) : D(84歳)、J(81歳)、K(79歳)、P(92歳)
 女性 中位以上(10人) : A(92歳)、B(75歳)、C(88歳)、E(88歳)、F(88歳)、H(94歳)、I(81歳)、L(82歳)、M(82歳)、O(86歳)

（1）男性について

年齢については、「中位以上」では全員80歳代であるのに対して、「中位以下」では70—90歳代と幅が広い。配偶者については、「中位以上」で「あり」が2人、「中位以下」では4人全員が「あり」となっている。その他の背景の変数（属性等）については、「中位以上」「中位以下」とも大きく異なることはないが、「重篤な病気」と「人生の危機」については、「中位以上」で経験している人が多い。次に、コード（概念的カテゴリー）との関連についてである。

生きた時代 「中位以上」「中位以下」とともに従軍経験はないが、少年時代あるいは青年時代には軍国教育を受け、空襲・爆撃、戦後の食糧難を経験しており厭戦感は強い。特に「中位以上」の87歳Qさん、「中位以下」の92歳Pさんは、戦後の価値観の激変（軍国主義から民主主義へ）に戸惑いを覚えた。「中位以上」「中位以下」とともにリタイア後は、地域活動に関わりをもつ人が多い。

幸福観 個々に「幸せ」の対象は異なるが、「中位以上」「中位以下」とともに家族・友人など身近な人との人間関係に楽しさや喜びを見いだしている。「中位以下」の人ではあるが、「戦時中に比べて便利になった今の生活」（Kさん）、「自分らしく生きられればそれでよい」（Jさん）、「戦前と違って自由に生きられること」（Pさん）などは、東洋的バランス志向性（内田, 2020, p.69）の幸福観の特徴を示す。

性格・自己観・人間観等 「中位以上」「中位以下」とともに外向的で対人関係には気を使う。「中位以上」の「生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること」（Gさん）は死生観でもある。「中位以下」の「歳をとってフレキシブルになり、物事に固執しなくなった」（Pさん）は意外に思えるが、この人が工学系の元研究者で、物事を合理的に判断する傾向が影響している可能性が考えられる。

無為自然 「中位以上」「中位以下」とともに「無理して頑張らない」など、東洋的な価値観に共感を示す。

自然・芸術に共感する心 「中位以上」の2人（G,Qさん）は、日本の自然に対する親近感や芸術に共感する心をもっている。「中位以下」の2人（D,Pさん）も芸術的なことに関心をもっている。

回想 「中位以上」の3人（G,N,Qさん）は、「過去を振り返っても今さらどうしようもない」、「中位以下」の2人（D,Pさん）も振り返り型の回想（子供や親しい人を亡くした悲しい思い出／子供の頃のことを懐かしむ程度）を時折するが、いずれも回想には否定的である。

人生の危機 「中位以上」は3人（G,N,Qさん）、「中位以下」でも2人（D,Kさん）は「人生の危機」を経験している。

無常観・死生観 「中位以上」の3人（G,N,Qさん）に共通項は認められないが、「生まれたものはすべて死ぬ」（Gさん）と明解な人がいる一方で、「まだ、そこまで考えていない」（Nさん）という人もいる。「中位以下」の3人（D,J,Pさん）は、「死」については恬淡として受容的である。

宇宙的感觉（命の連鎖） 「中位以上」で東洋的な宇宙観をもつ人がいるが（Gさん）、「中位以

下」にも「人知の及ばないもの（こと）はこの世に存在する」（Dさん）と考えている人がいる。

共時的体験（夢と現実の一致） 「中位以上」「中位以下」ともに共時的体験をもつ人はいない。

時間認識 「中位以上」「中位以下」ともに「現在」への関心が最も高く、「未来」への関心は低い。「過去」については、「中位以上」「中位以下」ともに評価が分かれる。「中位以上」で「時間の実体は『無』」（Gさん）と東洋的な捉え方をする人がいる。

空間認識 「中位以上」「中位以下」ともに「遠景」（神仏や宇宙）には関心が低いが、「近景」（自分や家族）に最も関心が高い人が「中位以上」に1人（Qさん）、「中景」（地域や文化）に最も関心が高いとした人が「中位以上」に1人（Nさん）、「中位以下」に3人（D,J,Pさん）いる。「中位以下」では「中景」に関心が高い傾向がうかがえ、身近な人との「つながり」という面では幸福観とも関連する。

（2）女性について

年齢については70—90歳代と幅が広い。配偶者については「なし」と答えた人が10人中7人となっており一つの傾向といえる。活動性指標では全体平均以上が8人、健康度も8人が「健康」、交流頻度も8人が全体平均以上で、暮らし向きは全員が「普通」以上となっており、一般の後期・超高齢者と比べて生活機能が高く健康で活動的であることがうかがえる。ただし、「重篤な病気」の経験が半数以上あり、「人生の危機」にいたっては10人中9人が「あり」と答えている。

次にコード（概念的カテゴリー）との関連についてである。

生きた時代 戦後の民主主義教育を経験するなかで女性なるが故の生き方・進むべき道の選択が行われてきたことをうかがわせる。戦争に対する厭戦感は強く、戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や活動を行っている人もいる（H,Lさん）。6人（B,C,E,F,H,Oさん）が現在も地域活動に関わりをもっており、身近な人との「つながり」を大切にしている。このことは、次の幸福観とも関連する。

幸福観 「幸せ」の対象は個々人では異なるものの、カテゴリーで括ると「子供の成長」「健康で自由な生活」「他者との良き関係」「好きな活動・平穏な日常」「内面の充実（生かされている）」に集約できるが、同時にカテゴリー間で複合的に連関しているのが特徴である。

性格・自己観・人間観等 インタビュー時の印象では全員外向的であったが、歳を重ねる中で「人間は生かされていると、しみじみ思う」（Fさん）と意識が内面に向かう人もいる。

無為自然 「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」「手術台に乗った気分」と、それぞれの経験に応じて言葉を紡ぎだしているが、ほぼ全員共感を示す。

自然・芸術に共感する心 ほぼ全員が共感を示す。特に自然観はアニミズム的であり、芸術については技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかを大切にする（Fさん）。

回想 3人（H,L,Oさん）が振り返り型の回想（子供の頃の楽しかった思い出／苦しかったこと等）を時折する。「戦争記憶の孫への伝承」（Lさん）という未来志向型の回想をする人もいる

が、総じて回想する人は少ない。

人生の危機 10人中9人が「あり」と答えており、4人（A,C,H,Mさん）は、がんなどの重篤な病気を経験、2人（B,Fさん）は自身の子供に関わる危機（娘の死／アフリカでの学術調査中の交通事故）を経験している。

無常観・死生観 4人（B,F,H,Lさん）が無常観に共感を示し、5人（A,C,I,M,Oさん）が「死」については、恬淡として受容的である。「今生きていることに感謝し、死んだら自分の生きざまや魂が残された人の記憶にどう刻まれるか」（Fさん）；このような死生観をもつ人もいる。

宇宙的感觉（命の連鎖） 一体性（母性愛）の象徴として示した「月」に親近感を覚えるのは4人（A,B,F,Hさん）、二元性（光と闇）の象徴として示した「太陽」に親近感を覚えるとしたのが2人（I,Lさん）であった。この2人は地上と宇宙を連続体と捉える東洋的な宇宙観をもつ。

共時的体験（夢と現実の一致） 2人（F,Oさん）が共時的体験を有しており、「偶然には意味がある」と考えている。

時間認識 4人（C,F,L,Oさん）は「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い。「過去・現在・未来は連続するもので『境』は存在しない」（B,Mさん）、と東洋的な見方をする人がいる。

空間認識 3人（I,L,Mさん）は「近景」（自分や家族）に、4人（B,C,F,Hさん）は「中景」（地域や文化）に最も関心が高い。「遠景」（神仏や宇宙）に最も関心が高い人が1人（Oさん）いるが、この人は日々平和に過ごせることに幸せを感じている。2人（C,Hさん）は、「近景」「遠景」を同程度に重視しており、宇宙や魂の存在を肯定する。

3. 考察

量的研究のクラスター分析では、特性値として主観的幸福感（SWB）と東洋の見方の得点の組み合わせにより、クラスター1を「低SWB・低東洋の見方群」、クラスター2を「中SWB・高東洋の見方群」、クラスター3を「高SWB・低東洋の見方群」とした。さらに、この3つのクラスターごとに老年的超越の傾向を当てはめると、クラスター1は「老年的超越に懐疑的（あるいは否定的）な群」、クラスター2は「老年的超越を肯定的に捉えている群」、クラスター3は「傾向としては老年的超越に懐疑的（あるいは否定的）ではあるが、老年的超越のポジティブな側面については肯定的に捉えている群」となった。

質的研究における研究協力者17人の類型区分は、このクラスター分析の結果にもとづくもので、類型Ⅰは6人（男性1人、女性5人）、類型Ⅱは6人（男性3人、女性3人）、類型Ⅲは5人（男性3人、女性2人）に分類された。そこで以下の二つの問いを設定し、事例分析とコード分析を行った。以下では、この結果について考察する。

- (1) 量的研究で明らかとなった3つの類型について、質的にはどのような個性や特殊性がみられるのか。
- (2) 3つの類型の個性や特殊性を超えて、さらに共通する要素、異なる要素はどのような

ものか。また、類型を超えた老年的超越の一般的な促進要因となるものが存在するのか。

3.1 事例分析から

事例分析では、サンプルの属性等の偏りから類型間の明確な違いは確認できなかった。そこでここでは、老年的超越および類型区分の指標とした東洋の見方、主観的幸福感を軸に据えて類型間の差異について考察する。

まず**老年的超越**である。老年的超越得点の全体平均（N=237人）を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が6人中5人、類型Ⅱでは6人中3人、類型Ⅲでは5人中4人となっており、類型Ⅱが、類型Ⅰや類型Ⅲとくらべて老年的超越得点が若干ではあるが低くなっている。各類型内での得点にバラツキがありクラスター分析のような明確な差異は認められず、クラスター分析の結果（クラスター2は高位）とは異なる。

類型Ⅰの得点が高いのは、6人中5人が女性であること、年齢が75歳の女性以外は80歳以上であることによるものであろう。量的研究でも性別と年齢（女性であること、年齢が高いこと）は老年的超越を高める要因となっていることを明らかにしている。類型Ⅱの得点が若干低くなっているのは、4人（男性2人、女性2人）の年齢が80歳前後と17人の中では低いことによるものであろう。また、コホートという面で共通するのは、この世代が多感な小学生のときに太平洋戦争を経験していることである。

一方で、類型Ⅱの94歳女性（Hさん）の得点は17人のなかでも最も高く、高齢の女性ほど老年的超越の得点が高いというこの傾向は、類型Ⅰ（Aさん：92歳）でも類型Ⅲ（Oさん：86歳）でもみられる。ただし、類型Ⅲで92歳の男性（Pさん）の得点が突出して低いのは、この男性が工学系の元研究者であり合理性を重視する性格が影響している可能性が考えられる。

次に**東洋の見方**である。東洋の見方得点の全体平均（N=237人）を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が6人中3人、類型Ⅱでは6人中5人、類型Ⅲでは5人中2人となっている。やはり各類型内でのバラツキはあるが、クラスター分析にほぼ合致する結果（クラスター2が高位）となっている。

類型Ⅰで東洋の見方の得点が最も高い75歳の女性（Bさん）は老年的超越得点も高い。この女性は若い頃に幼い娘を亡くした経験、さらに後年、配偶者を亡くした経験があるが、現在は地域活動の中心的存在としての役割を担っている人である。

類型Ⅱでは、やはり94歳女性（Hさん）の得点が高く、この女性も過酷な戦争体験があり、高齢になった今、「十分に生きた」という実感をもっており老年的超越の得点も突出して高い。

類型Ⅲにおいて86歳女性（Oさん）の東洋の見方の得点が高いが、この人は死に対して恬淡として受容的であり、やはり老年的超越得点も高くなっている。なお、類型Ⅲの92歳男性（Pさん）については、若い頃に『荘子』を愛読したことが影響しているのか、東洋の見方の得点が高いにもかかわらず老年的超越の得点が低くなっており、先述した理由（合理性を重視する性格）が影響しているのかもしれない。

次に主観的幸福感についてである。主観的幸福感の全体平均(N=237人)を基準にしてみると、類型Ⅰでは全体平均を超える者が6人中1人、類型Ⅱでは6人中4人、類型Ⅲでは5人全員となっている。類型Ⅰおよび類型Ⅱでは得点にバラツキがあるが、主観的幸福感の高さは、類型Ⅰ<類型Ⅱ<類型Ⅲの順となっている。このことはクラスター分析にはほぼ合致する結果である。なお、類型Ⅰの87歳女性(Bさん)と88歳の女性2人(E,Fさん)、類型Ⅱの82歳女性(Lさん)の得点が低いが、インタビュー時の印象からすると明らかに実態とは異なる。特に類型Ⅰの3人は現在でも積極的に地域活動に取り組むリーダー的存在である。主観的幸福感の測定には、数多くの高齢者研究で使用実績のあるPGCモラル・スケールを用いたが、超高齢者の幸福感の深層には、この尺度では測りきれない時間の長さをはらんだ要素と関連する次元(たとえば、ユーダイモニア¹⁷で定義されるような幸福)が潜在している可能性が示唆される。

3.2 コード分析から

老年的超越得点の全体平均(N=237人)を基準に、性別ごとに全体平均を上回る者を「中位以上」、全体平均を下回る者を「中位以下」とし、研究協力者17人を分類したところ、7人の男性のうち「中位以上」に分類された者は3人、「中位以下」に分類された者は4人であった。また、女性については、10人全員が「中位以上」であった。この分類にしたがってコード分析を行い、この結果を総括表で示したのが表3であった。

しかし、性別ごとに「中位以上/中位以下」に分類したとしても、まだ17人のコード(概念的カテゴリー)ごとの発話内容は多様で個性があり、また、一部にデータの欠損箇所があることなどから、分類内で無理に抽象化すると個々の「語り」に内在する重要な情報を捨象してしまうおそれがある。したがって、ここでは性別ごとに、あるいは性別を超えて、背景的変数(属性等)やコード(概念的カテゴリー)が老年的超越に与える影響について考察する。加えて、老年的超越理論の3つの次元(表1参照)との対応を示す(文中、「」は次元、〈〉はコード、()はその内容を記す)。

(1) 背景的変数(属性等)との関連

男性では、「中位以上」が3人、「中位以下」が4人とそれぞれ少人数であるため、年齢などの背景的変数(属性等)の違いが老年的超越得点の高低にどう影響しているかについては明確なことはいえない。女性では、10人全員が「中位以上」に分類され、年齢については70—90歳代と幅が広い。配偶者は7人が「なし」。活動性指標、交流頻度についても8人が全体平均以上、健康度も8人が「健康」、暮らし向きは全員が「普通」以上となっており、一般的な後期・超高齢

¹⁷ ユーダイモニア(eudaimonia)は、hedonism(快楽主義)に対置されるアリストテレスの考え方で、刹那的な幸福よりもむしろ真の潜在能力の具現化と訳される。すなわち、短期間の情緒的な幸福感(happiness)ではなく、目的・目標をもつこと、他者との満足な関係を築くことで達成される幸福感を指す(Ryff,1989,筆者抄訳)。

者と比べても生活機能が高く健康で活動的であることがうかがえる。

（2）コード（概念的カテゴリー）との関連および老年的超越理論の3つの次元との対応

生きた時代 男女とも少年時代あるいは青年時代に戦争を経験しており、厭戦感や反戦意識は強い。特に女性では、戦後の民主主義教育を経験するなかで自身の生き方・進むべき道について主体的な選択がなされてきたことがうかがえる。女性の半数以上が現在も地域活動に関わっており、身近な人との「つながり」を大切にしている。

幸福観 男性では、家族や友人など身近な人との人間関係に楽しさや喜びを見いだしているが、女性では、これらに加えて「幸せ」を感じる対象（子供の成長、自由な生活、好きな活動、内面の充実など）が多様である。男女ともに地域や身近な人たちとの「つながり」を大切にしている点では、東洋の価値観にみられる「関係志向性」の幸福観（内田他，2012）の特徴を示すものといえ、老年的超越（なかでも、ありがたさの認識、基本的肯定感、利他性）を高める要因でもある^{*18}。

性格・自己観・人間観等 男女ともおおむね外向的で対人関係には気を使う。男性（92歳）で「歳をとってフレキシブルになり、物事に固執しなくなった」という境地は、「自己の次元」の〈自己との向き合い〉（パーソナリティの隠れた側面／自己中心性の気づき）に通じるが、「中位以下」に分類されているのは、合理性を重視する工学系の元研究者としての性格が影響している可能性は否定できない。男女ともに、おおむね外向的な人が老年的超越得点も高いようにみえるが、外向的な人のなかにも歳を重ねるなかで意識が内面に向かうという人もいる。「自己の次元」に含まれる〈自己との向き合い〉（パーソナリティの隠れた側面に気づく）に通じることであるが、老年的超越の促進要因が「外向的」か「内向的」かは、短絡的に決めつけられるものではない。

無為自然 老年的超越理論の3つの次元には含まれないが、日本人高齢者における老年的超越の特徴を示すJGS-Rの下位因子である（増井他，2010）。「すべてを含む」「あるがまま」「なるようになる」「頑張りすぎない」「成り行きに任せる」など、そのイメージは男女ともに、ほぼ共通したものがある。『老子』の「無為」とは、「道は常に無為にして、而も為さざる無し」（蜂谷，2013）と解釈されるが、「多くを求めず、作為的なことは行わず、あるがままに生きよ」とする考え方であり、まさに東洋の見方を象徴する言葉である。Tornstam（2005）も、「加齢とともに円熟味が増すことによって、物質的で合理的な視点から、より宇宙的・超越的な視点へ移行することで生活満足度が高まる」（p.41，筆者抄訳）と述べているが、無為自然という思想は老年的超越と関わりの深い概念である。

自然・芸術に共感する心 男女ともに自然に対する親近感と芸術に共感する心をもっている。特に自然観はアニミズム的であり、山や樹木など自然物との対話に喜びを感じる点は東洋の見方に通じる。また、芸術については技術的・表面的なことよりも自己の内面にどう響くかを大切に

*18 量的研究における関連要因のSEM分析では、因果の方向として「主観的幸福感→老年的超越」のみが有意となっている。

考える。これらの点は、「宇宙的次元」の〈神秘性の気づき〉（音楽や絵画によって言葉の壁を超越し、生命の神秘に気づく）や、〈宇宙との一体感〉（自然の中での体験は宇宙との一体感を覚醒し、自己と宇宙との障壁を超越する喜びを喚起する）と相通するものがある。

回想 女性で未来志向型の回想（戦争記憶の孫への伝承）をする人もいるが、男性で「過去を振り返っても今さらどうしようもない」と否定的な人もおり、総じて男女ともに肯定的な回想する人は少ない。回想は「宇宙的次元」の〈時間定義の変化〉（幼年時代への回帰）と関連するが、この事例では、老年的超越の促進要因となっているようには思えない。

人生の危機 男性では3人が、女性では6人が重篤な病気を経験しており、男女ともに「人生の危機」を経験している人は老年的超越得点が高い。日本の先行研究（増井他, 2012；増井, 2013；増井他, 2019）でも同様の報告がなされており、「人生の危機」が老年的超越を高める要因となっているのは明らかであろう。

無常観・死生観 男女ともに、おおむね「死」については恬淡として受容的であり、「死は天命」とする日本人の死生観に通じる。また「無常観」に共感を示す人も数人いるが、その背景には、諸行無常や仏教の無常観といった東洋的な考え方がある。**人生の危機**とも関連があるが、「宇宙的次元」の〈死生観の変化〉（死ぬような体験をすると死への恐怖心が消える／人生後半期での成熟は、生と死に対する新たな見方を喚起する）と通じるところがある。

宇宙的感觉（命の連鎖） 男性で「中位以上」に東洋的な宇宙観をもつ人がいるが、「中位以下」にも「人知の及ばないもの（こと）はこの世に存在する」と神秘的な考えをもつ人がいる。女性では、「月」（一体性の象徴）に親近感を覚えるのは4人、「太陽」（二元性の象徴）に親近感を覚えるのは2人と分かれたが、「月」や「太陽」に親近感を覚えるということは、「宇宙的次元」の〈宇宙との一体感〉（自己と宇宙との障壁を超越する喜び）に通じる。

共時的体験（夢と現実の一致） 2人の女性に限られるが共時的体験（夢と現実の一致）があり、「偶然には意味がある」と考えている。この2人の女性の老年的超越の得点は高く、共時的体験が関連している可能性は否定できない。ユングは「意味のある偶然の一致」は元型的な基盤が関係しているとし（Jung & Pauli, 1955 河合・村上訳 1976, pp.31-32）、Tornstam（2005）も「元型は老年的超越の文化的な背景として調節項になっている」（p.107, 筆者抄訳）と述べているが、この2人の文化的な背景（元型的なもの）は不明である。

時間認識 「現在」をどう生きるかに関心が高く、「過去」については評価が分かれるが、「未来」については関心が低い。女性で「過去・現在・未来は連続するもので境は存在しない」という見方をする人がいるが、時間概念の捉え方は「宇宙的次元」の〈時間定義の変化〉（過去と現在の境界の超越）と共通する。男性で「時間の実体は無」と考える人は、東洋の宇宙観と通じるところがある。

空間認識 男女ともに、「近景」（自分や家族）または「中景」（地域や文化）に最も関心が高いが、「遠景」（神仏や宇宙）には関心が低い。「近景」と「遠景」に同じように関心が高い人は、宇宙における魂の存在を肯定する。これは、「宇宙的次元」の〈神秘性の気づき〉（この世には人知や

感覚を超えた未知なるものが多々ある）に通じる。「近景」や「中景」への関心は、**生きた時代**や**幸福観**でも述べたように他者との「つながり」という意味で「関係志向的幸福」（内田，2021）とも関わってくる。

Ⅲ 総合的考察

4. 量的研究と質的研究の統合

本研究の主たる目的は、Tornstamの研究や日本の先行研究において明らかにされてきた老年的超越の関連要因について、その連関を構造的に把握することであり、なかでも東洋文化的な要因が及ぼす影響を検証することであった。本章では、まず老年的超越の関連要因について、量的研究と質的研究で得られた知見と、Tornstamの研究や日本の先行研究との関連を論じる。その上で、量的研究と質的研究の統合を試みる。

なお、以下の記述で量的研究の関連要因に関する個所は、原則として潜在変数を『 』で、観測変数を「 」で表記する。

（1）量的研究の概要

量的研究については、第Ⅰ部（奥村，2022b）で報告したとおりであるが、要点のみを記すと以下のとおりである。

第1は、調査対象の高齢者251人（男性140人、女性111人）のSEMによる多母集団分析の結果、男女間でほぼ同質の共分散構造（配置不変性）が認められたが、『老年的超越』に影響を及ぼす要因の規定力については特徴的な違いが認められた。男性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋の見方』および『危機の経験』である。『活動性』と「暮らし向き」については、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。「年齢」については、『老年的超越』への直接効果は認められないが、『東洋の見方』を介して間接的に『老年的超越』へ影響を及ぼしている可能性はある。

一方、女性では、『老年的超越』への直接効果が認められたのは、『主観的幸福感』『東洋の見方』および「年齢」である。「暮らし向き」については、男性と同様、『主観的幸福感』を介して『老年的超越』に影響を及ぼす。『危機の経験』については、『老年的超越』への直接効果は認められなかった。

このように男性と女性では、影響要因の関わり方に若干違いが認められるが、直接的な効果という点では『主観的幸福感』と『東洋の見方』は共通しており、「年齢」については、女性では直接的であるが、男性では間接的に影響を及ぼしている可能性が示唆されることである。

このような「性別」「年齢』『危機の経験』による『老年的超越』への影響については、Tornstam（2005）の量的研究や日本の先行研究（増井他，2010；増井他，2012；増井他，2019）でも認められているところである。

第2に、『主観的幸福感』と『老年的超越』との因果的な関連について双方向のパス解析を行ったところ、『主観的幸福感』から『老年的超越』へのパスのみが有意となり、この結果はTornstam（2005）の量的研究や日本の先行研究（増井他，2010）とは異なるものであった。ただし、Tornstamの量的研究では、生活満足度（現在の生活の満足度を5件法で問う単項目尺度）が従属変数として用いられており、また、増井他の研究では、本研究と同様PGCモラル・スケールを用いているが、クラスター分析の群分けの指標としての扱いである。このように両研究は、PGCモラル・スケールで測定された主観的幸福感を従属変数としているものではないため本研究との比較は難しいが、SEM分析の結果としては、男女ともに『主観的幸福感』が『老年的超越』を高めるという片方向の因果の流れのみが有意となった。

第3に、『老年的超越』への強い影響因となった『東洋の見方』と『主観的幸福感』に関しては、クラスターを独立変数とする一般線形モデルによる共分散分析の結果、クラスター2（中SWB・高東洋の見方群）が『老年的超越』の6つの下位尺度すべてにおいて得点が高く、『老年的超越』を肯定的に捉えている群であることが確かめられた。クラスター2の特徴は、『主観的幸福感』が中庸のレベルにあることであり、この場合に『老年的超越』の得点が高いということは、東洋文化の影響を受ける日本人高齢者の幸福感には、「バランス志向的幸福観」（内田，2020，p.67）の特徴が反映されていることを示唆するものである。

以上は量的研究で明らかにされた諸点であるが、比喩的な言い方をすれば、量的研究の対象が「森」であるとすれば、この「森」からさらに75歳以上の後期・超高齢者を抽出し、インタビューを併用しながら個別の「木」の特徴を分析したのが質的研究であった。

（2）量的研究と質的研究の統合

量的研究と質的研究の統合の目的は、量的データの統計分析により一般化された「森」の全体像に対して、フィールドワークにより、その「森」を構成する「木」の個別観察を行い、事象の内側から「森」全体の理解をより深めることにある。したがって量的研究と質的研究は互いに相補的關係にあるといえる。

抽出された17人のサンプルの特性は、①老年的超越の得点が高いこと、②15人が80歳以上であること、③女性の構成割合（58.8%）が高いこと——から、量的研究で明らかにした老年的超越を高める要因の条件に見合っており、共通の主題に対する質的側面からのデータと位置づけることができるであろう。

図8は、老年的超越の関連要因について、量的研究と質的研究を統合し概念モデルとして提示したものであるが、要素間の関連の基本構造をみるのが目的であるため、細部の関係は捨象して示している。

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
 — 「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—

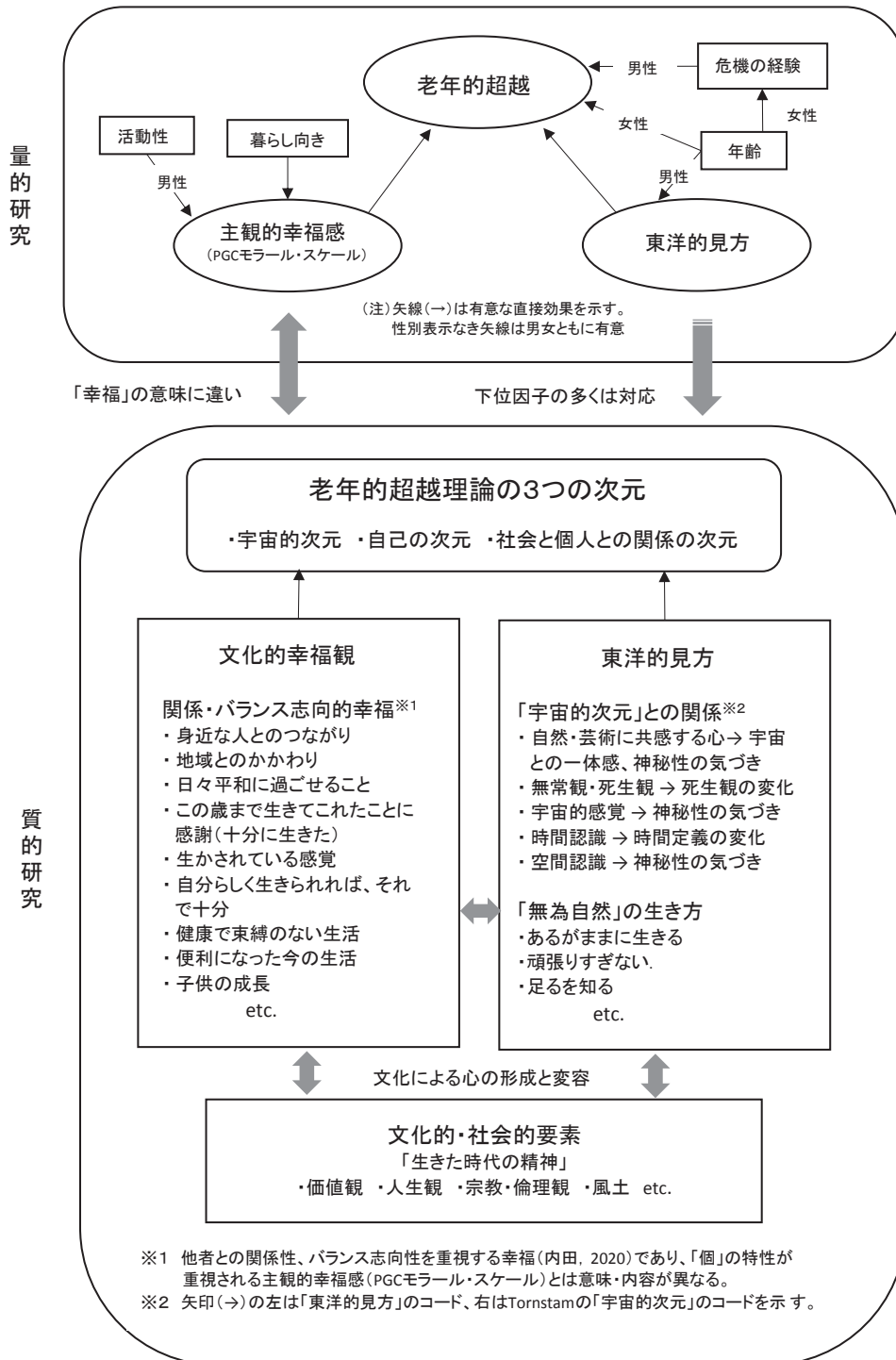


図8 量的研究と質的研究の統合：要因関連の概念モデル

上段フレーム、すなわち「森」に相当する部分は、SEM分析の結果から有意な要因間の関係を抽出しスケルトン図で示している。下段フレーム、すなわち「木」に相当する部分は、量的研究において『老年的超越』との強い関連が認められた『主観的幸福感』と『東洋の見方』について、質的研究の事例・コード分析における関連する内容（「文化的幸福観」と「東洋の見方」）を対応させており、枠内には発話内容の一部を示している。

下段フレームは、「文化的幸福観」¹⁹「東洋の見方」「文化的・社会的要素」の3つのカテゴリーで構成されるが、「文化的幸福観」と「東洋の見方」は相補的關係にあり、さらに、これらの背景には「文化的・社会的要素」としての、その人が生きた時代の精神、文化を構成する価値観や人生観が反映される。

それぞれのカテゴリーは文化心理学（柏木他，1997）や「文化的幸福観」（内田他，2012）の考え方を参考に、次のような視点にもとづき構成している。

文化的幸福観 「幸福観」（ここでは、感情としての「幸福感」とは区別し、「幸せ」と感じる[・]とき、[・]ことなど、幸福の対象や前提、価値観を意味する）に関する13人の発話内容の一部を枠内に掲示しているが、男性・女性ともに、家族や友人など「身近な人とのつながり」や「地域とのかかわり」に楽しさや喜びを見いだしている人が多い。特に女性では、「日々平和に過ごせること」「この歳まで生きてこれたことに感謝（十分に生きた）」「生かされている感覚（内面の充実）」「自分らしく生きられれば、それで十分」「健康で束縛のない生活」「子供の成長」と、幸福を感じる対象が多様である。

内田（2021）は、これまで自身が行ってきた日本人の幸福に関する調査で回答の多くが、他者との関係性や家族との穏やかな生活が占める割合が非常に高いものであったことを紹介している（たとえば、平和で安定的な暮らし、ささやかな日常の幸せへの気づき、他者から感謝されること、自然の恵みに感謝すること、など）。そして、このようなときに感じる幸福を「関係志向的幸福」と呼んでいる。この定義からすると、先に挙げた人たちの「幸福観」は、ほぼこの定義にあてはまると考えてよいであろう。いずれも戦争という厳しい経験を経て心の奥深く「身体化」（上野，2008）された思いが言葉となって表われたものであり、この意味でも「文化的幸福観」といえるであろう。

東洋の見方 図8では、老年的超越が高い者との関連が認められた5つのコード（概念的カテゴリー）[自然・芸術に共感する心、無常観・死生観、宇宙的感觉（命の連鎖）、時間認識、空間認識]と、Tornstamの老年的超越理論の「宇宙的次元」との対応関係（矢線の右に対置）を示

*19 内田・萩原（2012）によれば、「文化的幸福観は、文化を構成する価値観や人生観を反映し、とりもなおさずその文化・思想的背景によりはぐくまれる」とされている。ここでは、研究協力者の発話の内容の多くが、内田（2020, p.67）のいう「関係・バランス志向的幸福観」の考え方に類似するものであるため、「文化的幸福観」という用語を使用した。

している。〈宇宙との一体感〉〈神秘性の気づき〉〈死生観の変化〉〈時間定義の変化〉などは、東洋の見方の特徴と通じるものがある。

また、「無為自然」は、老子哲学の中心をなす概念であり、「あるがままに生きる／頑張りすぎない／足るを知る」などは、「文化的幸福観」の「この歳まで生きてこれたことに感謝（十分に生きた）／生かされている感覚／自分らしく生きられれば、それで十分」などのバランス志向的な幸福と通じるものがある。

文化的・社会的要素 17人に共通するのは、少年・少女時代あるいは青年時代の戦争体験である。また、終戦直後の社会の混乱と価値観の激変は、彼ら・彼女らが否応なく影響を受けた歴史的に共有する体験である。この「身体化」された思いが、その後のものの見方や人生観に大きな影響を与えていることは容易に想像できるであろう。特に女性は、戦争に対する厭戦感は強く、高齢になった今も戦争の悲惨さを後世に伝えるべく記憶の伝承や平和活動を行っている人もあり、このような活動は、その人たちの「生きがい」にもなっているようである。

また、歳を重ねるなかで意識が内面に向かい、人間は生かされていることをしみじみと感じるようになったという人、長い人生経験から「生きることは死ぬこと、死ぬことは生きること」と生死を超越的に捉えるように考え方が変わったという人もいる。

戦中の軍国主義教育から戦後の民主主義教育への価値観のドラスチックな変化を経験してきた人たちの「性格・自己観・人間観等」は、自分たちが「生きた時代（コホート）」の文化的・社会的要素（価値観、人生観、宗教・倫理観など）と相互に関わりをもつことで作り上げてきたものであると言えるであろう。

このように老年の超越は、背景にある「文化的・社会的要素」の体系に沿って反応する「文化的幸福観」や「東洋の見方」と深く関わる（影響を受ける）ことで発達するものである。なお、「文化的幸福観」の枠内の内容については、老年の超越理論では「自己の次元」〈自己中心性の低下〉や「社会と個人との関係の次元」〈人間関係の意味づけの変化〉に通じるものもみられる。

見落としてはならないのは、量的研究の2変数相関分析では、主観的幸福感と東洋の見方のそれぞれの下位尺度間には有意な相関関係はほとんど認められなかったが、質的研究では、「文化的幸福観」と「東洋の見方」には相補的な関連（「無為自然」の生き方は両者に通底する）が認められたことである。このことは、「幸福」の感じ方には背景にある文化に根ざす価値観が反映されるということであり、分析結果の解釈にあたっては、この点をふまえて慎重に判断する必要があるであろう。

5. 本研究の問題点と今後の課題

以下の(3)、(4)、(6)については、第Ⅰ部において述べたので、ここでは要点のみを記す。

(1) 調査対象者の特性について

本研究の調査対象者（質問紙を配布した総数363人）は、高齢者大学の受講生が約8割を占め、

多くは健康で生きがい意識の高い層であると推察される。また、インタビューを行った17人の研究協力者についても、一般の同年代の高齢者と比べて健康度が高く、暮らし向きは普通以上、現在も地域活動にかかわるなどポジティブな意識の持ち主が多かったように思われる。したがってサンプルの特性としては、一種のバイアスがかかった標本となっていることは否めない。しかし、日本の高齢者大学受講生の属性や活動傾向については、多くの類似点（性別、年齢構成、健康度、生涯学習への関心度、地域活動への参加など）があり、地域的な特性には留意する必要があるが、研究対象の母集団としては、生涯学習に関心の高い60—80歳代後半のシニア層とみなすことはできるであろう。

(2) 分析方法について

関連要因のSEM分析モデルは、モデル構築上の技術的な制約もあり多少は問題のある部分もあるが、分析結果をみる限りでは、先行研究の知見からみても、おおむね妥当なモデルではないかと考えている。

なお、外生的な潜在変数（『活動性』と『危機の経験』）については、量的なことだけではなく、たとえば『活動性』では、日本人の幸福感に影響を及ぼす重要な要因とされる「ソーシャル・キャピタル（つながりの力）」（内田，2020，p.111）の質的側面を測定する工夫が必要であろう。

また、『危機の経験』についても、本人が危機と思う出来事（自身の病気や親しい友人・近親者の病気や死、大切な人との別離など）を単純加算しているだけである。しかし、Joan M. Erikson（2001）は老年期における「危機」について、「第八の段階で没頭し始めた絶望は、第九の段階では、切っても切れない道連れとなる」（pp.151-152）と述べており、80歳代後半から90歳代になると、身体能力や自尊心等のさまざまな喪失体験に見舞われ、多くの悲しみに向き合わなければならないとされる。このモデルでは、絶望感のような深刻な「危機」についてはまったく考慮されていないが、高齢者が老年期の「危機」を乗り越えた先に到達する心の平穏が老年的超越でもあり、この両者の関係性については、量的な側面だけではなく質的な側面からもさらなる探求が必要であろう。

(3) JGS-Rの信頼性について

JGS-Rについて確認的因子分析を行ったところ、増井他（2013）の研究と同様、「脱二元論」の信頼性係数は低い値（ $\alpha = .43$ ）であった。「脱二元論」は、東洋的なものの見方であり老年的超越の重要な下位次元であることから、他の事例によるさらなる検証が望まれる。

(4) 「東洋の見方」の測定尺度について

「東洋の見方」については、これを測定するための既存の尺度は見当たらなかったため、本研究において「〈老い〉に対する東洋的態度」と称する尺度を作成した。この尺度の信頼性および妥当性については一定程度保たれていると判断したが、この結果も本研究の調査対象となった高

齢者データにもとづくものであり、他の高齢者サンプルでも同様の結果が得られるのか検証が必要であろう。

(5) 「幸福感」の測定尺度について

本研究では「幸福感」の測定に PGC モラール・スケール²⁰（表4）を用いた。この尺度は高齢者の主観的幸福感を測定する尺度として、これまで多くの研究で使用されてきたものである（古谷野，1996）。

表4 PGC モラール・スケールの項目 改訂版

<心理的動揺>
今年になって前よりもささいなことが気になるようになりましたか ^{a)}
心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか ^{a)}
いろいろなことを心配しますか ^{a)}
以前より怒ることが多くなりましたか ^{a)}
物事を深刻に考える方ですか ^{a)}
ちょっとしたことでオロオロする方ですか ^{a)}
<孤独感・不満足感>
淋しいと感じますか ^{a)}
友人や親戚によく会いますか
生きていても仕方がないと思うことがありますか ^{a)}
悲しいことがたくさんありますか ^{a)}
生きることは自分にとって大変なことと思えますか ^{a)}
現在の生活に満足していますか
<老いに対する態度>
年をとるほど物事は悪くなると思えますか ^{a)}
去年と同じくらい元気ですか
年をとるにつれて役に立たなくなると思えますか ^{a)}
年をとるということは若い時に考えていたよりも良いと思えますか
今、若い頃と同じくらい幸せと思えますか

^{a)} は逆転項目。「はい」「いいえ」、「そう思う」「そう思わない」などの2件法で回答。

出典：SONIC 研究 第1波調査報告書（2017，p. 20）

古谷野（1996）によれば、PGC モラール・スケールによって測定される主観的幸福感は、George（1981）のいう2軸（「認知／感情」と「短期／長期」）の組み合わせで評価すると、3つの下位因子のうち、「老いに対する態度」は「認知・短期」的、「心理的動揺」と「孤独感・不満足感」は「感情・短期」的な要素の総合として概念化されるとしている。このように、PGC モラール・スケールは、「短期」的な要素で主観的幸福感を定義し、生活満足度尺度（LSIA）のように

*20 Lawton によって開発されたモラールの測定尺度で、1972年に22項目6因子の尺度として開発されたが、1975年に17項目3因子の尺度に改訂された（古谷野，1996）。

「認知・長期」的な要素（たとえば、“人生をふりかえってみて満足できるか”など）を含まないのが特徴である。質的研究において、類型Ⅰ・類型Ⅱに分類された4人の女性のPGCモラル・スケールの得点が明らかに低すぎることを指摘したが、幸福感の「長期」的な側面が評価されていない可能性が高いのである。

また、PGCモラル・スケールの質問項目をみると、逆転処理（17項目のうち12項目）がなされるとはいえ、「古い」をネガティブに捉える表現形が目立ち、背景には1970年代の欧米社会における〈個〉を重視する価値観（自立心、自尊心、活動性、役割、健康、若さなど）が色濃く反映されているように思われる。

このような価値観は、現代日本においても文化を超えて普遍的に共通するものなのであろうか。

さらに、設問に対する回答も二項選択（「はい／いいえ」「そう思う／そう思わない」）の構造となっており二元的で、「あいまいさ」を許容する東洋人の思考様式（たとえば、ものごとを陰陽の相補の関係で捉えるなど）には馴染みにくい面があるように思われる。

本研究では、先行研究との比較という意味合いと、老年学の分野では主観的幸福感の測定尺度として多くの実績を有する、との理由からPGCモラル・スケールを使用した。結果的には、上に述べたような「幸福」についての文化的な価値観に関わる問題点が浮き彫りになった。

ところで、幸福感には個人差だけではなく、一定の文化差も存在するとして、幸福感のメタ理論ともいえる「文化的幸福観」が注目されている（内田他，2012）。内田（2020, p.64）は、満足感・幸福感の規定因は歴史的に構築された様々な文化的・社会的要因によって大きく異なるとして「協調的幸福尺度」（表5）を開発している。

表5 協調的幸福尺度（Hitokoto & Uchida, 2015）

-
1. 自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う。
 2. 周りの人に認められていると感じる。
 3. 大切な人を幸せにしていると思う。
 4. 平凡だが安定した日々を過ごしている。
 5. 大きな悩み事はない。
 6. 人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができる。
 7. まわりの人たちと同じくらい幸せだと思う。
 8. まわりの人並みの生活は手に入れている自信がある。
 9. まわりの人たちと同じくらい、それなりにうまくいっている。
-

「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答。 出典：内田（2020, p.28）

この尺度は、高齢者を対象にしたものではないが、日本人のものの見方の根底にある陰陽思考や関係志向の価値観を反映するもので、「日本だけではなく、他の国でも一定の妥当性をもっていることが確認されている」（内田，2020, p.29）と述べている。特に、「老年的超越」と「幸福感」との関連を分析する場合には、「幸福感」については、短期的な評価だけではなく、生きる意義や、

自分の人生を振り返ってどう総括し評価するのか、といった長期のユードイモニア的^{*21}な幸福の視点が重要となってくるであろう。

今回の研究においても、幸福感の測定に「PGC モラール・スケール」ではなく、「協調的幸福尺度」(高齢者を対象にした尺度ではないため、そのまま使用できるかどうかの検討は必要である)のような東洋的な価値観が反映された尺度を使用しておれば、「老年的超越」と「幸福感」との因果関係については、また、違った知見が得られた可能性は十分ありえよう。

(6) 老年的超越と主観的幸福感および東洋の見方との関連について

関連要因分析では、『老年的超越』と『主観的幸福感』との間に双方向の因果関係の存在を仮定して分析を行ったところ、『主観的幸福感』から『老年的超越』へのパスが有意となった。一方、クラスターを独立変数とした共分散分析では、『老年的超越』の下位尺度得点が最も高くなるのは、『東洋の見方』の下位尺度得点が高く、かつ、『主観的幸福感』は中庸のレベルにある場合であった。これらの知見は、老年的超越が生活満足度（本研究では主観的幸福感）を高めるという Tornstam (2005) の仮説とは異なる結果であった。東洋文化の影響を少なからず受ける日本の高齢者の幸福感を測定するのに、1970年代に米国で開発された PGC モラール・スケールが本当に相応しいのか、今一度検証が必要なのではないかと思われる。

老年的超越研究は同時に「幸福な老い」の研究でもあり、「老年的超越」と「幸福感」との関わりを解明することは極めて重要な研究課題である。その際、内田(2020, p.64)が指摘するように、人が幸福を感じることを意味する「幸福感」と、その前提となる文化的な視点に着目した「幸福観」との関係性をふまえて議論することが肝要であろう。

(7) その他

質的研究の対象となった17人の高齢者は、全員少年・少女時代あるいは青年時代に戦争を経験しており、コホートという面ではサンプルに偏りがあることは否めない。したがって、戦後世代を対象とした質的分析を行った場合には、結果が異なることは十分ありえよう。

百寿者(100歳以上の13人)にとっての幸福感の構成要素を記述することを目的とした質的研究(安本他, 2017)があるが、この論文では5つのカテゴリー(「前向きな気持ちで生きること」「制限の中で生きること」「他者とのよい関係を築くこと」「人生の充足感を感じること」「あるがままの状態を受け入れること」)が抽出されている。これらのカテゴリーは、本研究の質的研究でも表現形には違いがあるもののほぼ同様に確認された内容であり、両サンプルの年齢構成には違いはあるが、「幸福」についての認識には共通するものがあり、やはりコホート(主には戦争経験)が大きく影響している可能性があるように思われる。

なお、本研究は、基本的には横断研究である。老年的超越が加齢に伴う心理的発達の現象であることからすれば、この研究の結論については、前提として特定時期の横断データであることを

*21 脚注17による。

ふまえて解釈しなければならないであろう。しかし、インタビュー調査の対象となった17人の高齢者では、生きた時代や、山あり谷ありの人生経験を経て「身体化」された幸福観、人生観、死生観、時間・空間認識など、その「語り」のなかには、長期的な縦断変化が含まれていると考えることもできるであろう。

量的研究の関連要因分析で『老年的超越』との因果関係が明らかとなった『主観的幸福感』『東洋の見方』および『危機の経験』については、加齢とともに変化する時間的要因であることは疑う余地はなく、理想としては縦断研究が望ましいが、これは今後の研究課題としたい。

加齢によるポジティブティ傾向（年齢が高くなるにつれ、幸福感が肯定的になる傾向）に注目して、欧米や日本の先行研究をレビューし、その比較研究を行った唐澤（2012）は、幸福とエイジングの関係については、文化を超えて一貫した結果が得られなかったとした上で、「陰陽のバランスを幸福と考える日本文化の分析が、世界の幸福研究に寄与する可能性がある」と結んでいる。

今後の日本における老年的超越研究においては、これまで繰り返し述べてきたように、「幸福観」と「東洋の見方」との相補的な連関、加えて「幸福」と「老年的超越」との因果的な関係性について、東洋の文化的視点をふまえて様々な角度から知見を積み重ねていくことが、日本人の「幸福な老い」の要因を明らかにしていく上で重要になってくる。

謝辞

本研究は、平成30年度植田安也子学術振興基金大学院生等研究奨励事業の助成を受け実施した。記して感謝の意を表します。また、本研究にご協力いただいた公益財団法人京都SKYセンター、同シニア大学受講生、インタビュー調査や質問紙調査に快く応じてくださった高齢者のみなさまに深く感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 赤瀬川 原平（1998）. 老人力 筑摩書房
- 秋山 弘子（2000）. 21世紀の高齢社会と老年社会学のフロンティア——日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信—— 老年社会科学, 22（3）, 338-342.
- 東 洋（2012）. 幸福感尺度の概念的妥当化——唐澤論文へのコメント—— 心理学評論, 55（1）, 152-155.
- Erikson, E.H., & Erikson, J.M. (1997). *The Life Cycle Completed : A REVIEW*. Expanded Edition. New York: W.W.Norton & Company. (エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M. 村瀬 孝雄・近藤 邦夫 (訳) (2001). ライフサイクル, その完結 < 増補版 > みすず書房)
- George, L. K. (1981). Subjective well-being ; Conceptual and methodological issues. *Annual Review of*

Gerontology and Geriatrics, 2, 345-382.

- 健康長寿研究 (SONIC) (2017). SONIC 研究 第1波調査報告書 健康長寿研究会 Retrieved from <http://www.sonic-study.jp/pdf/171208.pdf> (2018年11月27日)
- 蜂屋 邦夫 (2013). NHK100分 de 名著 老子 NHK 出版
- Hitokoto, H. & Uchida, Y. (2015). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, 16, 1-29.
- 福永 光司 (訳) (2013). 老子 筑摩書房
- Jung, C. G., & Pauli, W. (1955). *The Interpretation of Nature and the Psyche*. New York: Bollingen Foundation. (C.G. ユング・W. パウリ・河合 隼雄・村上 陽一郎 (訳) (1976). 自然現象と心の構造——非因果的連関の原理—— 海鳴社)
- 神谷 美恵子 (2004). 神谷美恵子コレクション 生きがいについて みすず書房
- 柏木 恵子・北山 忍・東 洋 (編) (1997). 文化心理学——理論と実証—— 東京大学出版会
- 唐澤 真弓 (2012). 幸福なエイジング——文化比較研究からみえてくること—— 心理学評論, 55 (1), 137-151.
- 河合 隼雄 (1967). ユング心理学入門 培風館
- 河合 隼雄 (1977). 無意識の構造 中央公論社
- 河合 隼雄 (1997). 「老いる」とはどういうことか 講談社
- 河合 隼雄 (1999). ころと人生 創元社
- 河合 隼雄 (1999). 中空構造日本の深層 中央公論新社
- 河合 隼雄 (2006). 対話する生と死——ユング心理学の視点—— 大和書房
- 河合 隼雄 (2010). 〈心理療法〉コレクションV ユング心理学と仏教 河合 俊雄 (編) 岩波書店
- 古谷野 亘・柴田 博・芳賀 博・須山 靖男 (1989). 生活満足度尺度の構造——主観的幸福感の多次元性と其の測定—— 老年社会科学, 11, 99-115.
- 古谷野 亘 (1996). QOLなどを測定するための測度 (2) 老年精神医学雑誌, 7 (4), 431-442.
- 古谷野 亘・安藤 孝敏 (編) (2011). 改訂・新社会老年学 第2版 ワールドプランニング
- 京都大学ころの未来研究センター (2016). ころの未来, 15, 36-39.
- 京都大学ころの未来研究センター (2017). ころの未来, 16, 2-14.
- 京都大学ころの未来研究センター (2018). ころの未来, 18, 7-18.
- 増井 幸恵・権藤 恭之・河合 千恵子・呉田 陽一・高山 緑・中川 威…藺牟田 洋美 (2010). 心理的 well-being が高い虚弱高齢者における老年的超越研究の特徴 老年社会科学, 32 (1), 33-46.
- 増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・小川 まどか・石岡 良子・立平 起子…高橋 龍太郎 (2012). 地域高齢者における老年的超越の関連要因の検討 日本心理学会第76回大会発表論文. doi.org/10.4992/pacjpa.76.0_1EVB33
- 増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・小川 まどか・石岡 良子・立平 起子…高橋 龍太郎 (2013). 日本版老年的超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討 老年社会科学, 35 (1), 49-58.

- 増井 幸恵 (2013). 老年的超越研究の動向と課題 老年社会科学, 35 (3), 365-373.
- 増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・小川 まどか・石岡 良子・小園 麻里菜・稲垣 宏樹 (2015). 地域在住高齢者における老年的超越の縦断的变化の検討 日本心理学会第79回大会発表論文. doi.org/10.4992/pacjpa.79.0_2AM-116
- 増井 幸恵・中川 威・権藤 恭之・小川 まどか・石岡 良子・稲垣 宏樹・石崎 達郎 (2019). 地域高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響の検討——疾患罹患・死別イベントに対する緩衝効果に注目して—— 老年社会科学, 41 (3), 247-258.
- 中川 威・増井 幸恵・呉田 陽一・高山 緑・高橋 龍太郎・権藤 恭之 (2011). 超高齢者の語りに見る生 (life) の意味 老年社会科学, 32 (4), 422-433.
- 中村 元 (1991). 人生を考える 青土社
- 中根 千枝 (1967). タテ社会の人間関係 講談社
- Nisbett, R.E. (2003). *The Geography of Thought*. New York: A Division of Simon & Schuster. (リチャード・E・ニスベット, 村本 由紀子 (訳) (2004). 木を見る西洋人 森を見る東洋人——思考の違いはいかにして生まれるか—— ダイヤモンド社)
- 大橋 保夫 (編) (1979). 構造・神話・労働——クロード・レヴィ=ストロース日本講演集—— みすず書房
- 奥村 幸雄 (2014). 高齢者の『生きがい』についての研究 (第I部) ——幸福な老いに関する研究のレビューと生きがい感創出システムの構築—— 京都府立大学福祉社会研究, 15, 225-239.
- 奥村 幸雄 (2016). 高齢者の『生きがい』についての研究 (第II部) ——共分散構造モデルによる関連要因の影響度分析—— 京都府立大学学術報告 (公共政策), 8, 145-174.
- 奥村 幸雄 (2022a). 「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究——「東洋の見方」が及ぼす影響についての分析と考察—— 京都府立大学大学院公共政策学研究科 博士論文
- 奥村 幸雄 (2022b). 「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究 (第I部) ——「東洋の見方」が及ぼす影響を中心にして—— 京都府立大学学術報告 (公共政策), 14, 123-171.
- Progoff, I. (1973). *Jung, Synchronicity and Human Destiny: Noncausal Dimension of Human Experience*. The Julian Press. (イラ・プロゴフ, 河合 隼雄・河合 幹雄 (訳) (1987). ユングと共時性 創元社)
- Ryff, C.D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- 佐藤 郁哉 (2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践—— 新曜社
- 佐藤 眞一・高山 緑・増本 康平 (2014). 老いのころ——加齢と成熟の発達心理学—— 有斐閣
- 佐藤 眞一・権藤 恭之 (編) (2016). よくわかる高齢者心理学 ミネルヴァ書房
- 末田 啓二 (2019). 我が国の高齢者への「老年的超越」概念の適用に関する問題点 甲子園短期大学紀要, 37, 1-7.
- 鈴木 大拙 (1997). 新編 東洋的な見方 上田 閑照 (編) 岩波書店

「老年的超越」をめぐる文化・心理・社会的関連要因に関する研究（第Ⅱ部）
—「東洋の見方」が及ぼす影響を中心に—

- 鈴木 大拙 (1972). 日本的靈性 岩波書店
- 鈴木 大拙 (1987). 禪 工藤 澄子 (訳) 筑摩書房
- 竹田 恵子・太湯 好子 (2006). 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討 川崎医療福祉学会誌, 16 (1), 53-66.
- Tornstam, L. (2005). *Gerotranscendence: A Developmental Theory of Positive Aging*. New York: Springer Publishing Company.
- 都築 学・白井 利明 (編) (2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 鶴見 俊輔 (編) (1997). 老いのいき方 筑摩書房
- 上野 千鶴子 (2008). やさしい経済学「21世紀と文明」 日本経済新聞 7月18日朝刊.
- 内田 由紀子・萩原 祐二 (2012). 文化的幸福感——文化心理学的知見と将来への展望—— 心理学評論, 55 (1), 26-42.
- 内田 由紀子 (2020). これからの幸福について——文化的幸福感のすすめ—— 新曜社
- 内田 由紀子 (2021). 日本における幸福と生きがい 生きがい研究 (一般財団法人 長寿社会開発センター), 27, 26-41.
- 山折 哲雄 (1995). 死を視ること帰するがごとし 講談社
- 山折 哲雄 (2010). わたしが死について語るなら ポプラ社
- 安岡 正篤 (1979). 老荘思想 新版 明德出版社
- 安岡 正篤 (1960). 易學入門 明德出版社
- 安元 佐織・権藤 恭之・中川 威・増井 幸恵 (2017). 百寿者にとっての幸福感の構成要素 老年社会科学, 39 (3), 365-373.
- 鷺田 清一 (2015). 老いの空白 岩波書店
- 和辻 哲郎 (1935). 風土——人間学的考察—— 岩波書店

(2023年10月2日受理)

(おくむら ゆきお 京都府立大学大学院公共政策学研究科学術研究員)

